

【漢検漢字文化研究奨励賞】最優秀賞

日本語医学用語の読みの多様性と標準化—「楔」字を例に—

京都大学医学部医学科 5年 西嶋佑太郎

目次

1. はじめに	7
2. 一般における「楔」	9
2-1. 辞書、辞典類	9
2-2. 新聞の振り仮名	10
2-3. 読みの妥当性	12
3. 各専門学会の用語集の「楔」	12
4. 「楔」を含む用語の変遷	14
4-1. 蘭学期	15
4-2. 明治期	17
4-3. 過去の医学用語辞典	19
4-4. 現代の医学用語辞典	19
4-5. 小括	20
5. 日本医学会と標準化	20
5-1. 『医学用語集第一次選定』	21
5-2. 『医学用語辞典』	22
5-3. 『日本医学会医学用語辞典』	22
5-4. 『学術用語集医学編』	23
5-5. 小括	24
6. 各用語と専門学会	35
6-1. 楔状	25
6-2. 楔入	30
7. おわりに	34

1. はじめに

医学分野には多くの専門学会があり膨大な数の専門用語が扱われているが、専門学会相互での用語の標準化は完全にはなされていない。医学生として医学を学習していると短期間にさまざまな専門分野の用語を目にすることになり、分野ごとの用語の不統一が明らかに見えてくる。

用語の不統一には、表記が不統一である例（「タンパク質」と「蛋白質」）、同じものを指しながら別の語が同時に存在する例（「副甲状腺」と「上皮小体」）、漢字の読みに揺れがある例（「頭」「楔」「茸」）など、さまざまなレベルのものがある。これらは歴史の過程の中で異なっていたり、専門分野の事情があったりして生じてきたものである。しかし医学という1つの分野の中でこういった多様性が存在することは好ましい状態ではなく、また一般社会や医学以外の学会、法律等との関連からしても標準化が求め

られ、日本医学会は医学用語の標準化に向けて用語管理委員会を設けて活動を行っている。開原（2010）はこの標準化の問題点として、用語の指示内容の標準化が困難であること、同義語が多数存在していること、表記の揺れがあることとしている。また香川（1997）は学会間の足並みがそろっていないことにも言及する。

しかしこのような問題点の挙げられる用語の標準化の対象は、主に用語の表記についてであって、用語の読みについてはあまり触れられていない。例えば、日常よく使用する「頭」字については「トウ」と読むことを原則とし（「頭蓋（トウガイ）」など）、「ズ」と読むことは「頭痛」を例外としているが¹、このように読みについて判断を示しているものは少ない。「頭」を含めいくつかの字あるいは語については『日本医学会医学用語辞典英和』第3版（2007）の凡例で、特に注意すべき読み方として第一選択を示しているが、「楔」字のみがそこに掲出されながら統一する判断が下されず、「優先した」という文言にとどまっている。これには「楔」字を用いる語が他の用語に比べて頻用されるわけではなく、また、複数ある読みのうちどれを第一選択にするかという判断根拠に乏しいという「楔」字特有の事情があると考えられる。

医学用語の読みの揺れについて言及したものとして、先に挙げた「茸」の読みについて、笹原（2010）では「鼻茸」が取り上げられている。それによると「茸」の読みは「たけ」「ジョウ」「ジ」と三転し、漢音「ジ」で読む層と慣用音「ジョウ」で読む層に分かれているという。「茸」を使用する語はほかに「茸状乳頭」や「茸状肉芽腫」などがあり、「ジ」「ジョウ」「きのこ」の揺れが現在でも存在している²。『日本医学会医学用語辞典英和』第3版（2007）は「鼻茸」について、『はなたけ』と読むことを原則とするが、通例「びじ」と読むものもある。（例：出血性鼻茸しゅっけつせいびじ）としており、はっきりしない。また「ジョウ」の読みについては触れられていない。

一方「楔」字の読みは、医学分野を広く調べてみると訓読みも含めて歴史上多くの読みがなされていた。そしてこれも現在に至るまで統一はなされてはいない。「楔」字の読みの多様性は現在でも唯一はっきりとした判断が下されないことから、読みの多様性の極致ととらえることができる。本論はこの多様性の極致という視点から用語の読みの標準化がどの程度の効果をもって行われてきたかを考察し、その中で現在まで連なる読みの標準化の問題点を明らかにすることを目的とする。加えて、多様でありながらも蘭学期から連続している医学用語が、これまでにどのように変遷してきたかを明らかにすることで、これまで全体が述べられてこなかった多様化と標準化の変遷全体を述べることをも目的とする。

本論では医学分野の「楔」字の読みがこのように多様であることの原因を、

-
- 1 『日本医学会医学用語辞典英和』第3版（2007）の凡例による。なお、「頭」字の読みについて、『神経学用語集』（2008）では凡例の中で、「ズ」と読み、例外を「頭蓋（ズガイ）」「頭痛（ズツウ）」の2つとしている。そのため神経学分野では「頭蓋」が「トウガイ」ではなく「ズガイ」と読まれる。日本医学会の原則が通用していない例の1つである。
 - 2 「茸状」の「茸」の読みの揺れについての具体例は以下のとおり、きのこ…『学術用語集医学編』（2003）『日本医学会医学用語辞典英和』第2版（2001）ジ…『解剖学用語』改訂13版（2007）『日本医学会医学用語辞典英和』第3版（2007）ジョウ…『標準生理学』第7版（2009）

- (1) そもそも「楔」字に主たる音読みがないために読みが定まっておらず、また慣用音も一般に行われていたこと。
 - (2) 医学用語辞典は長らく外国語の訳語を提示するにとどまり、それを日本語としてどう読むかを示すことまではあまり考慮されず、読みについて関心が低かったこと。
 - (3) 医学用語を統一しようとする動きがあっても医学分野全体に浸透するほどの効力を持ち続けたとはいえず、各専門学会に読みの位相が生じていること。
- の3つと考える。(1)については2. 一般における「楔」と3. 各専門学会の用語集の「楔」で、(2)については4. 「楔」を含む用語の変遷で述べる。これによって「楔」関連の用語に限定されるが、蘭学期から連続している医学用語の形と読みの変遷を一般のものと比較しながら継時的に追う。(3)については5. 日本医学会と標準化で考察し、6. 各用語と専門学会で各用語について考察する。これによってこれまでに行われてきた用語の標準化の動きの変遷とその問題点について考察する。

なお、本論では煩を避けるために用語辞典や医学書、辞書類の引用は書名と出版年で、その他は著者と出版年で示した。

2. 一般における「楔」

2-1. 辞書、辞典類

「茸」字の例では、正しくは「ジ」、慣用音は「ジョウ」ということであったが、「楔」はどうであろうか。漢和辞典、国語辞典で主なものに掲げられる音読みと熟語を調べ、表1と表2にまとめた。

「楔」字の中国での読まれ方としては、『説文解字注』六篇上によると『説文解字』で「機也從木契声」とあり、段玉裁はそれに対して注で音は先結切としている。『広韻』巻五では入声屑韻の屑小韻（先結切）と入声黠韻の夏小韻（古黠切）にあり、日本語にするとそれぞれ「セツ」「カツ」となる。

表1について、漢和辞典の音読みには漢音、呉音を分けるもの、うち漢音のみを掲げるもの、分けずに列挙するものがあった。「楔」の音読みは漢音で言えば、「カツ」「ケツ」「セツ」の3種であったが、どの辞典もこの3種を掲げているわけではなく、「ケツ」「セツ」あるいは、「カツ」「セツ」のようにうち2種を掲げるものもあった。熟語の読みでは漢音のみが使われており、呉音は使われていなかった。漢音の中でも「カツ」は熟語に用いられていない。語に着目すると、「楔形」「楔子」の「楔」には「セツ」「ケツ」の2通りの読みがあり、また「楔撃」「楔齒」などでは「ケツ」「セツ」のどちらかのみで読ませるといように語によって違いがあった。『新漢語林』(2011)や『全訳漢辞海』(2011)などは音読みの中でも読みによって意味が異なるとし、「カツ」「ケツ」は樹木の名、「セツ」はくさびやほうだて（門の両側の小柱）の意味とする。しかし、「くさび」という意味で使われる「楔子」や「楔形文字」の読みにも「ケツ」を載せるものがあることから、厳密に使い分けをさせているわけではないようである。音読み、熟語の読みともに漢和辞典の編纂時期によって大きな変化は見られなかった。

続いて表2について、「楔」を使う語はそれほど多くなく、「楔子」「楔状」「楔形文字」

が主なものであった。国語辞典では、熟語の読みが複数ある場合、どれか主たる1つに語釈が書かれ、他は項目として立てられていても主たる読みの方を参照させることが多い。そのため漢和辞典では列挙されていただけの読みにも国語辞典ではどれが主たる読みかの判断が示されており、例えば1922年の『言泉』は「楔」字の「ケツ」の読みをすべて「セツ」の誤読としている。しかし『言泉』のように読みを1通りに限定するものはむしろ少数で、他の辞典では語によって読みを変えているという状況であった。漢和辞典で複数の読みが存在した「楔形」の「楔」について、表2に挙げた国語辞典では「ケツ」のみで掲げるものは1つもなく、「セツ」のみあるいは「セツ」を参照するようにしている。また年代が新しくなるにしたがって「くさび」と訓読みさせるものが出てくることがわかる。一方、「楔子」の「楔」については、国語辞典では『言泉』を除いて「ケツ」の読みのみで掲げられているのに対して、漢和辞典では表1のように「セツ」のみあるいは「セツ」「ケツ」の2つで掲げられており、国語辞典と漢和辞典とで異なっていた。漢字の解釈が基本となる漢和辞典では「くさび」の意味である「セツ」の読みを優先し、実際の用例が基本となる国語辞典では「ケツ」の読みが優先されたと考えられる。ただしいずれも編集を経て掲載されたものであるため、実際の用例を完全に反映しているとはいえない。辞典類を総じていえば掲載されている音読みのうち熟語に用いるものは「ケツ」「セツ」の2つでいずれも漢音であった。

2-2. 新聞の振り仮名

「楔」を用いる語の読みは語によって、また国語辞典と漢和辞典とで異なっており、熟語中の「楔」の音読みは一意に決まるものではないということが確認できた。では辞書、辞典類には見られないような実際の用例はどうか、より実際に近い用例を見るために過去の新聞の振り仮名を調べた。対象は朝日新聞（聞蔵Ⅱビジュアル）、毎日新聞（毎索）、読売新聞（ヨミダス歴史館）、および神戸大学附属図書館新聞記事文庫所収の新聞記事を用いた。「楔」で検索して、その中で熟語で用いられているものを集め、画像で振り仮名を確認した。新聞の振り仮名はすべてに付されているわけではなく、また画像から振り仮名を判読できないものもあったため、読みが判明するものは一部であった。また神戸大学附属図書館新聞記事文庫の新聞記事は朝日新聞や毎日新聞のものを含むため、重複は除外した。結果を表3（1879-1950）・表4（1985-2014）に示す。

表3に掲げた熟語はキーワードや見出しで検索できるものであり、全文検索ではないため、全用例を網羅しているわけではない。神戸大学附属図書館新聞記事文庫のものは1912-1942年分、読売新聞は1912-1950年分、朝日新聞は1879-1950年分を集計した。「楔」の読みについて見ると、上で見た辞典類には載っていなかった読みが多数あることがわかる。特に「ケイ」は「セツ」「カツ」といった辞典に載っている読みよりも用例が多い。また「キツ」の読みも少数ながら存在したが、これについて『新明解国語辞典』（2012）では「楔形文字」の項で『「きっけい文字」というのは「楔形」の「楔」の類推読みに基づく』としている。「ケイ」と「キツ」はそれぞれ「契」「喫」から類推した音ということになる。ほかにもごく少数ではあるが「カ」「キ」「ケ」という読みも存在した。これはそれぞれ「カツ」「キツ」「ケツ」から「ツ」が脱落したものだと考えられる。

次に語に着目すると、辞典類に載っていなかった語が数多く見受けられる。神戸大学附属図書館新聞記事文庫所収の京城日報の記事では共同体を意味するような「楔」の用例が散見され、「楔有財産」「農務楔」「共同楔」などの語が見られた。この用例は辞典類に見いだせず、朝鮮半島独自の用例である可能性も考えられる。「楔戦法」「楔戦術」などは軍事関連の記事に見られるもので「楔を打ち込む」攻撃方法を指すと考えられる。「楔状攻撃」「楔状突破」という語も見られた。「楔状」の読みは表1や表2ではおおむね「ケツ」であったが表3では「カツ」「ケツ」「キツ」の3種が見られた³。「楔入」も「楔戦術」や「楔状突破」などと同様の意味あいでも用いられているが、読みの判明するものはなかった。

熟語のうち数の多いものでは「楔子」があり、約半数を占めている。「楔子」の楔の読みは先にも述べたように漢和辞典では「セツ」が優勢、国語辞典では「ケツ」が優勢であった。表3では読みの判明するものうち「ケツ」が約半数を占め、辞典にない「ケイ」が残りの半数、「セツ」はわずか5例のみであった。このことから「ケツ」の読みが優勢である国語辞典の読みの方が実際の用例に近いことがわかる。また「楔子」に次いで多い「楔機」にはほとんど読みが付されていないが、その使用法は「契機」と同義であった。これも辞典類には載っていない用例だが、「楔」が「ケイ」と読まれる理由として「契」からの類推であることのほかにこういった用例が新聞に登場することがあると考えられる。

表4に掲げた熟語は全文検索で得られたものである。毎日新聞は1994-2014年分、読売新聞は1986-2014年分、朝日新聞は1985-2014年分を集計した。表3と比べてみると読みの種類、語の種類が大きく減っている。表3では多くを占めていた「楔子」「楔機」、軍事関連用語はほとんど姿を消している。表4の用例の大半が「楔形文字」であり、そのほとんどが「楔」を「くさび」と読ませているが、「セツ」と読ませるものも朝日新聞に数例見られた⁴。他の語は数えるほどしかなく、「楔前部」のような専門用語の例が目立った。「楔」の読みは「ケツ」「セツ」「くさび」のいずれかであり、辞典類の読み方から逸脱するものはなかった。

新聞の振り仮名には、漢和辞典や国語辞典の熟語の読みに見られる「ケツ」「セツ」

3 軍事用語で「楔」字が使われ、読みがついているものを集めると以下のものがあつた。

楔状 (Ketsujo)、楔状攻撃、楔状線 『和独兵語字彙』(1909)

楔状 (けつじやう)、楔状攻撃、楔状線 『最新音引字典：普通語及兵語』(1911)

楔状突貫 (けつじやうとつくわん) 『大日本兵語辞典』(1918)

いずれも「楔」の読みは「ケツ」であり、新聞の振り仮名とは違って一貫している。軍事用語としては一貫していても、新聞に掲載するにあたって振り仮名が多様になってしまった可能性がある。

4 読売新聞 1956年5月24日付の「気流」という読者投稿欄には『「楔形」の読み方』という題で「楔」の読みの混乱について書かれている。投稿者は世界史で「楔形文字」を「キッケイモジ」と習ったが、国語辞典では「セッケイモジ」となっており、また漢和辞典には「キツ」の音がないことを述べている。表3、4では「ケツ」「セツ」と読む例は少数あるものの「キツ」と読ませるものはなく、先に述べた「キツ」を類推読みとする『新明解国語辞典』の解説も「楔形文字」の項にあるものであつた。実際には辞典類、新聞の振り仮名にも現れない読まれ方で定着しているものがあることがうかがわれる。

だけでなく、漢音「カツ」や辞書にない「キツ」「ケイ」などの読みが多数存在し、辞典類には載っていない熟語も多く見られた。実際には「楔」には多様な読みが行われていたことがわかる。しかしこれらは現在ではほぼ姿を消してしまっている。

2-3. 読みの妥当性

漢字の読みの妥当性に関する数値（最小値1最大値7）が、NTT データベースシリーズの『文字特性』（1999）に存在する。調査の対象は20歳台の男女24人で、『新明解漢和辞典』第4版（1990）に記載されている読みすべておよびNTTの作成した表記データベースの読みに対して、7段階で評価をしたものである。妥当性の評価基準は「読みに自信がある」「思い浮かべやすい」などであり、知らない漢字に対しては、与えられた読みが偏旁からどの程度想像可能であるかで評価されている。「楔」字についてのこの数値によると最も妥当性が高いものは「くさび」（4.67）で、「キッ」（4.25）「ケッ」（3.67）「ケツ」（3.33）「セツ」（2.92）が続く⁵。客観的な妥当性ではなく被験者の主観に基づいた値であるので、音読みでは辞書にない「キツ」が妥当性が高いことになっている。これは「楔」字の音読みを知らなかったために「喫」から類推した可能性が高い。「ケイ」は候補になかったのでどちらが慣用音として読まれやすいかは判明しなかった。辞書にある「ケツ」と「セツ」とを比べると、「ケツ」の方が妥当性がわずかながら高いと感じられていることが読み取れる。「楔」字単独で妥当性が判断されており、語による判断ではないために単純に比較することはできないが、この傾向は漢和辞典よりも国語辞典や新聞の振り仮名に近いものである。

一般において「楔」字には歴史上非常に多様な読み方が存在し、漢和辞典、国語辞典に掲載される読みも揺れている状況であった。現在新聞記事の振り仮名は「くさび」「セツ」にはほぼ収束しているものの、近年の調査から現代の若者でも過去に行われたのと同じような類推読みが行われる可能性があることがわかる。これらは「楔」字の読みが現在に至るまで常に一意に決まるものではなかったことを示すものである。

3. 各専門学会の用語集の「楔」

一般的に「楔」は、「セツ」や「ケツ」など辞典類に載っている読みが行われているが、過去には辞典類に載っていないような「ケイ」や「キツ」などの読みも行われていることを確認した。次に医学分野での「楔」の使われ方を概観すべく、各専門学会が出版している医学用語集に見られる「楔」を含む用語とその読み方を調べ、一般における「楔」字の読み方と比較対照する。

現在、日本医学会の用語委員会に属している専門学会は112あり、そのうち専門学会が用語集または用語辞典を出版しているものは63あった。これらの用語集・用語辞典の中で「楔」字がある用語を表5にまとめた。

これら用語集や用語辞典といったものは各専門学会にある用語委員会が中心となって

5 この調査で調べられた「楔」字の読みは「カチ」「カツ」「キッ」「キツ」「クサビ」「ケッ」「ケツ」「セチ」「セツ」「セツ」の10種類であった。「ケイ」の読みは対象になかった。

作っており、各用語委員会は日本医学会の用語管理委員会が作成した医学用語辞典や関連学会の用語集に依拠するところが大きい。しかし専門性の高い用語は各学会の用語集の方が詳しく、そのような用語は独自の基準で採用、配列されることになる。また用語集や用語辞典の体裁もさまざまで、和英・英和の形をとるもの、用語を五十音順に配列するもの、構造化された状態で用語を配列し索引を付すものがある。用語に読み方が示されているかは各用語集、用語辞典の体裁によるということになり、用語集から確実に用語の読みを抽出できるとは限らない。ただ読みが直接付されていない体裁のものでも、索引や用語の配列から推定できるものもある。こうして「楔」字を使用していた29の学会のうち、ほとんどの用語の読みを推定することができたが、読みがすべての用語集に付されておらず、不明なものもあるという点で、用語の読みに関心がそれほど高くないことがわかる。

表5に現れる「楔」字の読みは、「ケイ」「ケツ」「セツ」「くさび」の4種類であった。用語集によっては1つの用語に対して1つの読みを示すものも、2つの読みを示すものもある。用語集、用語辞典における用語の読みについては、『日本医学会医学用語辞典英和』第3版(2007)が第一選択を示さなかったように、専門学会として判断を決めかねている場合もあるであろうが、実際に用語集、辞典中で付されている読みを専門学会の判断の表出として一律に扱った。4種の読みのうち「ケイ」は『呼吸器学用語集』⁶(2006)のみに現れる、辞典類には載っていない読みである。木村(1961)は学生に解剖学用語を読ませてその読みを調査しており、その結果によると「楔」を「ケツ」と読んだ学生は約2割、対して「ケイ」が5割を超えていた。当時これほど「ケイ」と読む割合が多かったことを考えると、この「ケイ」の読みも当時の臨床の場で使用されていた可能性は考えられる。表3で見たように「ケイ」という読み自体は戦前の用例に見られるものであり、用語集として「ケイ」の読みで配列するということは呼吸器学の分野では「ケイ」の読みが位相読みとして定着している可能性がある⁷。

また、表中には掲げていないが、『麻酔科学用語集』第3版(2002)の「用例」の「ふりがな」の項で『「楔入圧せつにゅうあつ」については「きつにゅうあつ」は辞書にな

6『呼吸器学用語集』(2006)の和英では五十音順に用語が配列されているが、個々の読みは示されていない。しかしその配列から読みを推定することはできる。「楔」の場合、「楔状切除」が「瘞笑(ケイショウ)と「頸静脈(ケイジョウミヤク)の間に位置することから「ケイジョウセツジョ」であると断定することができる。他の「楔」を使った語も同様である。

ただ、『呼吸器学用語集』には明らかに配列場所が誤っているものや誤植が数多くある。前身である『胸部疾患用語集』(1996)でも、日本語用語に関して編集方針等がほとんど書かれていない。『呼吸器学用語集』と『胸部疾患用語集』はその点からいって他の用語集と同等に読みが信頼できるとはいえない可能性がある。「楔」字の「ケイ」の場合は、多くの用語が散在しているので、配列については誤りがある可能性は低いと考えた。

7呼吸器学の医師にうかがったところ、「キツ」「セツ」という読みが聞かれ、一様ではなかった。「ケイ」とは読まないといい、『呼吸器学用語集』で「ケイ」と読ませていることも知られていなかった。そのため『呼吸器学用語集』の「ケイ」の読みは編集時点で一部の医師が読んでいたものが反映されてしまった可能性が考えられる。「ケイジョウセツジョ」とされる「楔状切除」は『呼吸器外科手術書』(2007)では「セツ」と読ませている。

い読みなので除外した』とある。この「キツ」の読みが行われていることは『医学書院医学用語辞典』（2012）の「楔入圧」の項に『〈きつにゅうあつ〉は間違った読み方であるが、臨床の場でしばしば使用されるので注意が必要である』とあるように、これもこの領域での位相読みである可能性がある⁸。したがって、この時点で臨床の現場で用いられうる「楔」字の読みは「キツ」「ケイ」も含めた5種類ということができる。

次に、どの用語にどの読みが使われやすいかについて数例を挙げると以下のようになる。（数字はその読みを載せた用語集の数）

楔状骨・楔状軟骨	ケツ 4
楔状切除	ケツ 4 セツ 2 ケイ 1 不明 2（楔形一くさび 1）
楔入圧	ケツ 3 セツ 2 ケイ 1

数字は関連学会の数に左右されるため一概に比較はできないが、用語によって統一のされ方が異なることがわかる。「楔状骨」は「ケツ」の読みのみであるが、「楔入圧」の読みはばらばらである。これらの用語と学会の方針などとの関係については6. 各用語と専門学会で述べる。

表5には「楔」字に対応する英語を掲げた。「楔」を使用する語に対応する英語は大きく分けて *cuneiform*, *cuneate* と *wedge* の2つである。この2つはどちらも「楔」という意味を持つが、使われている分野が異なっている。原語と音読みの関係を見てみると、*cuneiform*, *cuneate* が原語であるもの、すなわち主に解剖学系の用語では「ケツ」の読みを採用しているものがほとんどである。例外として整形外科学で「楔舟関節」などの読みに「ケツ」のほかに「セツ」も併記されている。それに対して *wedge* の訳語の読みは多様であり、まとまりが見えてこない。先に見たように「楔」字を用いる一般の語でも「ケツ」や「セツ」のどちらでも辞書に配列されるものがあり、これは原語の違いでなく各用語の事情によって異なっていると推察される。そのためこれ以降の表では原語の違いを重要視せず、掲出を省略している。

一般の「楔」字の読みと比較してみると、医学分野の「楔」字の読みも一般のものと同様に読みが一意に定まらない状況であった。また「キツ」「ケイ」といった辞典類に現れない読みについては、新聞記事の振り仮名には現在現れないが、医学分野では依然見られるという違いがあった。一般においても多様なものであるから医学分野でも多様であるのは当然であるように思われる。しかし、「楔状」を共通して含む「楔状骨」と「楔状切除」とで読みのばらつき方が異なることは一般のものに見られなかった現象である。これには語によって、学会によって読みに対する姿勢が異なるという医学分野内の細かな事情を反映するものと考えられ、それがすなわち医学用語に対して行われた標準化の程度の差の表れであると考えられる。

4. 「楔」を含む用語の変遷

上で述べたように、現在のところ各学会で、または用語により「楔」字の読みがさま

8 「キツ」の読みを載せる辞典には『早引き看護・医学略語辞典』第2版（2009）がある。注7のように「キツ」と読む医師もいた。

ざまに異なっていた。次に歴史的にこれらの用語はどう変遷してきたのかを調べ、多様化と標準化の過程を明らかにし、その中で標準化がどの程度の効力を持って行われてきたかを概観する。用語辞典の過去の版の多くは参照することが困難であったので、医学用語辞典や医学書を対象にして「楔」字の使われ方とその過程を、広く蘭学期から現在に至るまで継時的に追う。

4-1. 蘭学期

蘭学期の医学用語は南蛮流医術、阿蘭陀流医術で使用される語を学習する際に必要となる簡単な医学用語集の発生から始まる。杉本（1976）ではこういった「口和」「和解」と呼ばれる用語集 14 種を挙げる。この用語集には人体部位の名称だけでなく動植物や外科の道具の名称、一般の語が含まれていた。しかしこれらの用語集の段階では「楔」字を用いるような細かな人体部位名称は挙げられておらず、基本的な語がほとんどであった⁹。またこれらは医学用語集として本格的に辞典として編纂されるまでには至らず、初期の用語集が幕末まで普及していたという¹⁰。

この「口和」「和解」の内容からして、「楔」が初めて登場すると考えられるのは解剖学分野である。解剖学は医学の基本となる学問であり、『解体新書』をはじめ蘭学期に多くの解剖学書が出版されている。最初の翻訳解剖学書は本木良意『和蘭全軀内外分合図』であり、著されたのは 17 世紀の後半である。これは『解体新書』より 90 年以上前であるが、刊行されたのは『解体新書』の 2 年前の 1772 年である。『和蘭全軀内外分合図』の訳語は「指十二幅腸」「盲目腸」など、現代医学用語の原点を示しているといわれるが、骨に関するものなどは漢方の用語を基本としているとされる¹¹。また宝暦年間以降、山脇東洋『蔵志』（1759）を嚆矢とする人体解剖の記録が見られだし、解剖図、解剖学書が出版されるようになった。『解体新書』は初めて組織だった解剖学とその訳語を日本に導入したのものとして評価されている。『重訂解体新書』（1826）は大槻玄沢が『解体新書』の改訂を行ったもので、全体の 3 分の 2 を占める「名義解」で術語を解釈している。また『医範提綱』（1805）は宇田川玄真によるもので「腺」「腓」の造字を行ったことで知られる¹²。『重訂解体新書』より『医範提綱』の方が簡明であったため影響力は大きく、現在まで残る用語が多数ある。その他解剖学書には解剖の方法を説くもの（『解体瑣言』）、独自の造字を使用するもの（『八譜』『生象止観』）、漢方の立場に基づくものや折衷するもの（『解体発蒙』『内景備覧』）などがあり、さまざまな解剖学書が作られた。

「楔」字が使われてかつ記述される可能性が高いものに「楔状骨」がある。これには頭部のもの Sphenoid bone（現在は蝶形骨）と足のもの Cuneiform bone（現在も楔状骨）

9 例えば「口和」の 1 つである『阿蘭陀南蛮一切口和』に掲げられる人体部位の名称は「頭」「鼻」「髪毛」「目」「耳」「口」「舌」「齒」「頸」「腸」「五臓」「陰莖」「囊」「玉門」「脈」「脊」「乳」「筋」といったたぐいである。

10 杉本（1978：443）

11 杉本（1987：70-72）

12 笹原（2007：632-694）

とがある。この2つについて江戸時代の解剖学書に見えるものを調べた¹³。

和蘭全軀内外分合図 (1772)	Sphenoid bone—蝙蝠ノ翅ノ如クナル骨 ¹⁴	
解体新書 (1774)	Sphenoid bone—楔骨	Cuneiform bone—楔骨三
解剖図譜 (1822)	Sphenoid bone—都兒格鞍骨	Cuneiform bone—鑿様骨
重訂解体新書 (1826)	Sphenoid bone—楔骨	Cuneiform bone—楔骨三
解体則 (1858)	Sphenoid bone—楔骨	Cuneiform bone—楔骨

蝶形骨、楔状骨はいずれも骨であるとはいえ、蝶形骨は頭蓋の中心の方に位置し、楔状骨は足の小さい骨であるため、骨の名称を述べる箇所があっても必ずしも言及されているものではない。多くの解剖学書は腹部の内臓の記述を主とするなどして骨の名称を詳細に述べているものは少なかった。

蘭学において訳語を作る方法には3種あり、『解体新書』の名称を使用すると「翻訳」(既存の漢語に置き換える)、「義訳」(漢字語をつくりだす)、「直訳」(漢字で外国語音を転写する)である。造語が豊富に造られるのは義訳によるものであり、沈(2007)の語を借りれば、「義訳」はさらに汲意法と模借法とに分けられる。汲意法とは形態素に分解できない語を、その意味をふまえて訳語を考案するものである。一方、模借法は外国語を形態素に分解しそれに対応する形態素を組み立てるもので、上に挙げた訳語はほとんどこれによっている。沈は模借法について注意すべき点として、外国語の形態素に対する漢字の選択の問題を挙げる。漢字の選択に影響を与えるものに候補となる漢字の訓と、蘭学者が常用字を避けることの2つを述べる。

13 原語が示されることは少ないのでその骨の名称と考えられるものを探した。参照した解剖学書は以下のとおり、

山脇東洋『蔵志』(1759)、伊良子光顯『外科訓蒙図彙』(1769)、本木良意『和蘭全軀内外分合図』(1772)、河口信任『解屍編』(1772)、中井履軒『越俎弄筆』(1773)、杉田玄白『解体新書』(1774)、小石元俊『施薬院解男体臓図』(1798)、柚木太淳『解体瑣言』(1799)、宇田川玄真『医範提綱』(1805)、海上随鴻『八譜』(1810頃)、三谷公器『解体発蒙』(1813)、野呂天然『生象止観』(1815)、池田冬蔵『解剖図譜』(1822)、斎藤方策『把尔翁湮解剖図譜』(1822)、大槻玄沢『重訂解体新書』(1826)、石坂宗哲『内景備覧』(1840)、穂積惟正『医経撥乱』(1842)、新宮涼庭『解体則』(1858)

『八譜』は杏雨書屋蔵、『生象止観』は国際日本文化研究センター蔵、『和蘭全軀内外分合図』『解屍編』『医経撥乱』は京都大学蔵のものを参照し、『解体則』は新潟大学古文書・古典籍コレクションデータベース、『解剖図譜』は『図録日本医事文化史料集成』(1977)、『越俎弄筆』はWEB 懐徳堂、その他は早稲田大学古典籍総合データベースによった。

14 澤井(2008)によると日本における蝶形骨の記述の始まりは『解体新書』であるという。しかしこの「蝙蝠ノ翅ノ如クナル骨」は、解剖図の中で指示対象が何かはっきりしないが、蝶形骨の一部を指すものと考えられる。澤井によれば蝶形骨の一部である翼状突起がコウモリに例えられることは16世紀の解剖学者ヴェサリウスが行っているという。『和蘭全軀内外分合図』は、刊行年であっても『解体新書』より2年早く、蝶形骨の記述はこれが始まりであると考えられる。ただし西洋で骨全体がコウモリに例えられるのは18世紀以降であるので、『和蘭全軀内外分合図』の時点では蝶形骨全体の記述の始まりというわけではない。また蝶形骨をコウモリに例えるという訳し方はそれ以降の解剖学書の訳語には引き継がれなかった。

『解体新書』の「櫛」は『大漢和辞典』(1960)によれば「器物の脚」や「木を切る具」の意、「櫛」は「くさび」の意である。『解体新書』の「櫛骨」にあたる原語は wedge と同語源¹⁵で「楔」を意味する。「櫛」をどういった意味あいでも用いたかはわからないが、『重訂解体新書』をはじめ他の解剖学書の訳語から見て「くさび」かそれに類するものの意味を持たせていたのであろう。訳者にとってどの字が常用の字であるかはわからないが、「楔」字をあえて避けた可能性も考えられる。『解剖図譜』の訳語の「都児格鞍骨」は現在の用語でいえばトルコ鞍(蝶形骨骨体の上面後部)であって Sphenoid bone と完全に対応しているわけでないが、『解体新書』や『重訂解体新書』でも「都児格鞍骨橋」は蝶形骨骨体全体を指しており、用語の指す対象が現在と異なっている¹⁶。上に挙げた語の中ではこの「都児格鞍骨」のみが「直訳」を含んでいた。『解剖図譜』の「鑿様骨」の「鑿」字は「のみ」の意であり、これもあえて「楔」字を避けた可能性はある。『解剖図譜』の訳語はいずれも後の解剖学書には受け継がれなかった。そして『重訂解体新書』になってついに「楔」が登場する。これで「楔」「櫛」と「くさび」を意味する漢字が2つ使われることになったが、これは新宮涼庭『解体則』にも受け継がれた。

日本では蘭学者が模倣法によって新語を生み出しており、「楔」字を用いる解剖学用語もその一部であった。新語に使用する漢字の選択に関して中国の訳書の影響があるかを考える。中国における西洋解剖学の導入については、小川(1955)によれば、1720年頃に康熙帝がフランス人宣教師に命じて解剖学書を翻訳したが、刊行も転写も許されることがなかったということがあった。中国一般に西洋解剖学が導入されたのは合信(Hobson)の『全体新論』(1852)以降とされる。『全体新論』は1857年に日本でも刊行されているが、『全体新論』では Sphenoid bone は蝴蝶骨、Cuneiform bone は脚掌後骨の一部となっていて「楔」字は見られない。また年代的に『重訂解体新書』よりも後であるため、「楔」字を医学分野で最初に用いたのは日本であり、『重訂解体新書』がその始まりといえる。

4-2. 明治期

明治期の医学用語については、澤井(2012)で概観されている。明治期には各分野で広く用いられる影響力のある書籍があったことによって、用語が淘汰され、標準的な用語が全国的に学ばれたことが述べられる。また、明治期の医学生は、音声的なコミュニケーションと視覚的なコミュニケーションとを複合的に組み合わせて日本語医学用語を習得するとし、視覚的な情報源として日本の医学書と、外国語の教科書を読むための各種対訳辞典の訳語が無視できないとする。医学がドイツに範をとったこともあり、医学に特化した独和辞典も現れた。

(1) 対訳辞典

まず明治期に出版された独和辞典を中心とする対訳辞典中の「楔」を表6にまとめ

15 澤井(2008:125)

16 大鳥(1932:476)

た¹⁷。医学に特化した独和辞典等も含めた。各辞典の「楔」を含む用語のほとんどは解剖学の用語でさらにそのほとんどは Keilbein すなわち頭部の蝶形骨あるいは足の楔状骨に関するものであった。年代が後になるにつれて細かい用語が多く収録されている。また「楔骨」から「楔状骨」へと「状」が追加されている。蝶形骨と足の楔状骨とはこれまでに同じ「くさび」を意味する「楔」「櫛」を使用しており、この時期には頭部のものには「蝴蝶骨」、足のものには「楔状骨」というように訳し分けが行われ始めていることが読み取れる。「蝴蝶骨」という用語は『全体新論』（1852）に現れるものが起源となっており、これが明治時代になって普及した。「楔」を含む用語に読みを示すものは少なく、わずかに『挿入図画独和字書大全』（1890）の「カツ」、『実用和独羅医語辞典』（1911）の「ケツ」があった。「カツ」は新聞の振り仮名にも出現した読み方であり、当時ある程度使用されていたと考えられる。しかしこの2種だけではどの読みが医学分野において一般的であったかというところまでは断定できない。

一方、和独辞典は1906年に2冊あり、「楔」を含む語はいずれも「ケツ」のところに配列されている。和独辞典が出現するという事は独和辞典を引きながら用語を習得する段階から進んで、日本語の用語がしっかりと統一されてきていたことを示すものであろう。

(2) 医学教科書

続いて医学教科書中の「楔」に関連する語をまとめた。前項の中で「楔」字を使用する語のほとんどが解剖学分野であったことから解剖学の教科書を中心に調べ表7にまとめた。明治期の解剖学の教科書は島田（2012）の解剖学書の項に従った。

「楔骨」が「楔状骨」へ変化していくこと、Sphenoid bone の訳語が「蝴蝶骨」に変わることは前項のとおりである。教科書では Sphenoid bone に対して「蝴蝶骨」「楔状骨」の両方の訳語を掲げることが多く、これは徐々に「蝴蝶骨」が浸透していく過程を示すものであろう。表7より、「楔」字は『解体説約』（1870）から『解剖訓蒙』（1872）にかけて、Sphenoid bone の訳語の用字から Cuneiform bone の訳語の用字へと移っており、『新撰解剖学』（1905）を除くすべての教科書で、両訳語が同一になることはないようになっている。表7の解剖学書のうち読みを示しているものはわずかに『解剖摘要』（1876）と『近世解剖学』（1917, 1934）のみであった。独和辞典と和独辞典そして医学教科書の読みを総合すると「ケツ」が多数派になるが、ここでもこれが医学分野において当時一般的であったかどうかまでは断定できない。

このように対訳辞典にも医学教科書にも読みを付すものはわずかであった。明治期の医学教科書において用語の視覚的側面がある程度標準化されていることはわかったが、音声的側面すなわち用語の読みまで標準的なものが学ばれていたかは定かではない。しかし、少なくとも読みを示すものが少なく、わずかながら判明する読みもばらばらであることから、ここに読みについて標準化しようとする動きは読み取れない。

17 奥山虎章『独和医学字典』（1881）には「楔」字はなく、「櫛骨」、「櫛状軟骨」といったように「櫛」字が使われていた。「櫛」は同じく奥山虎章が筆記した解剖学書『講筵筆記』（1871）にも見える。「櫛」には「くい」「くつわ」などの意があり、「くさび」の意は見つからないが、これにも「くさび」の意味を持たせたものと思われる。

4-3. 過去の医学用語辞典

明治期までのもので、「楔」を含む用語が掲載されていてなおかつ読みが判明するものはわずかであった。これはこの時期の用語辞典の主目的が英語やドイツ語、ラテン語などの訳語を示すことにあって、日本語の用語を中心に据えたものでないということが考えられる。昭和初期以降からは日本医学の独立という観点から日本語で医学を記述する機運が高まり、日本医学会の用語統一に向けた動きへとつながっていった¹⁸。

また明治期を過ぎると医学教科書、対訳辞典の種類は減り、参照できるものも少なくなる。これは医学知識の吸収が一定のレベルまで到達してきたことに関係があるだろう。そこで残る明治期から現代までの主な一般の医学用語辞典に現れる「楔」を含む用語とその読みを表8にまとめた。明治期までの用語が大正期から戦後にかけて同じように用いられており、そこに明治期までのような劇的な変化は見られない。明治期までに形作られた用語が現在に至っても使用されていることがわかる。戦後になると「楔状」を「くさびじょう」と読ませたり、「楔入」という新たな語が出現したりという変化が見られた。これはそれまでの医学の進歩を反映して新たな語が生み出されていく過程の中で出現した現象であり、それぞれ6. 各用語と専門学会で述べる。また読みについては昭和期以降では「ケツ」が優勢となっており、これも明治期までのものと連続している。ただし『現代医学大辞典』（1930）の「セツ」の読みはこれまでに見た解剖学用語中のいずれの読みにも該当しないものであった。

4-4. 現代の医学用語辞典

日本医学会の医学用語辞典とは異なり、一般の医学用語辞典は用語の統一という見地で作られたというよりは実際に使用するという見地から、統一されていなくてもそのまま項目として採用されていることがある。その点で、3. 各専門学会の用語集の「楔」で見た「楔」字使用の現状をまとめているともいえる。そこで一般のものとして、『南山堂医学大辞典』第19版（2006）、『ステッドマン医学大辞典』第6版（2008）、『医学用語シソーラス』第7版（2011）、『医学書院医学用語辞典』（2012）を取り上げ、そこに収録された「楔」字の用語と読みを表9にまとめた。表8と比べると「楔」を含む用語の数がかなり増えているが、これは医学の急速な発展とそれに伴う用語の増加を示しているといえる。

一般の医学用語辞典は用語の標準化や各分科会の領域に縛られるものではないため、他の用語集より収録する語の数が多くなっている。読みに関していえば『医学用語シソーラス』と『医学書院医学用語辞典』は読みを「ケツ」と「くさび」に限定して配列しているのに対し、『南山堂医学大辞典』と『ステッドマン医学大辞典』は各用語の読みを多様なままに受け入れて配列している。用語を1つ1つ見ていくとこれら4つの

18 国語協会の機関誌『国語運動』では「てにはドイツ」問題がしばしば取り上げられた。「てにはドイツ」とは名詞、動詞などはすべてドイツ語を用い、それに「てにをは」をつけた言語で明治以来、教育、臨床の現場で使われてきた。この現状を憂い、日本語による医学用語の確立が議論されている。そのため当時、日本語の医学用語に不統一が生じていても、ドイツ語の単語で意思の疎通ができてしまうために、日本語の用語の問題が人びとの意識にのぼりにくかったと考えられる。

辞典の間でも読みが異なるものがある。例えば、「楔状切除」の「楔」は『医学書院医学用語辞典』と『南山堂医学大辞典』では「ケツ」とするが、『ステッドマン医学大辞典』では「くさび」「セツ」も載せる。また「楔入圧」の「楔」は、『南山堂医学大辞典』では「セツ」と読み、他のものは「ケツ」とする。用語の読みを他のどの用語集を参照して決めるか、そしてそれらの読みを整理するかそのまま掲載するかという辞典編集の方針によって、読みが異なってしまうという状態であり、それはそのまま、読みが多様であることを示している。

4-5. 小括

「楔」を含む用語は蘭学の訳語創出の中で外国語を形態素に分解して日本語のものに置き換える模倣法によってその多くが生み出された。『解体新書』では「櫛」「織」という難しい字が使われており、あえて「楔」字を避けた可能性も考えられる。『重訂解体新書』に至って「楔」字が用いられるようになり、それ以降、解剖学書で「楔」字が一般的なものになっていった。「楔」字は2種の骨の名称に用いられたが、これは中国の『全体新論』の訳語を用いたり、「くさび」の意を持つ複数の字を使ったりすることで衝突を避けていた。明治期までにこの変化は収束し、現在もそのまま使われている。読みについては対訳に重きを置いていたこの時期には読みが明らかなものはほとんどなく、数少ないものを総合すると「ケツ」が多数派であった。ほかには「カツ」「ケイ」の読みがあったが、読みの明らかなものが少ないので教育や臨床の現場でどの読みが優勢であったかは断定できない。この「ケツ」の読みも現代まで受け継がれている。

現代では医学の進歩によって医学用語そのものの数も格段に増え、「楔」を含む語も増えている。その中で「楔入」という語の登場や「楔状」の「くさびじょう」という読み方も見られるようになっている。読みに関する方針は用語辞典によって異なっており、同じ用語が異なる読みで配列されるという事態も起こっている。これは用語辞典が読みをきちんと記載して配列するようになってきたことが一因であり、またこれまで顕在化してこなかった用語の読みの多様性が浮き出てきたものとも考えられる。

5. 日本医学会と標準化

医学用語を上位から影響を与えるものとして日本医学会の用語委員会とその前身の医学用語標準化の動き、そして漢字に関する国語施策がある。日本医学会は1938年に用語の整理を継続的に行うことを決めて以降、用語辞典をたびたび出版している。また文部科学省は学術用語に関する施策を行ってきており、さまざまな分野の学術用語集を作成している。これらの用語集、用語辞典は、日本医学会や文部科学省の用語の標準化に関する考えが見られる資料として扱うことができる。日本医学会、文部科学省の関係する用語集の中の「楔」を含む用語とその読みを表10にまとめた。以下に昭和期以降の医学用語の動向を用語に関する集会、委員会の活動を中心に述べ、医学分野の標準化の動きの歴史を明らかにする。

5-1. 『医学用語集第一次選定』

日本医学会が用語に関して動きを見せる以前は1932年に結成された国語愛護同盟およびその後継である国語協会の医学部会が用語に関する議論を行っていた。そこには各専門学会で用語に携わる委員が属しており、定期的に例会を開いて活発な議論が行われていた。国語愛護同盟の活動の記録は雑誌『国語の愛護』に詳細に記されている。国語愛護同盟医学部会はその方針に用語の整理や平易化、和語の採用などを掲げており、特に耳でわかる用語ということを強調し、従前まで一部の学会（解剖学、産科婦人科、眼科）だけで行われていた平易化を主眼とした用語整理¹⁹は見直しが必要とされた。1935年の第11回医学部例会では、用語の読みの不統一からなる看護教育上の不便が話題として挙がっている。そこでは「頭」に「トウ」「ズ」の2つの区別があることが問題視されている。

国語愛護同盟は1937年に国語協会（雑誌『国語運動』）と合併し、医学部会の活動はそこに引き継がれた。この国語協会医学部会の例会では医学用語の読みについての議論が見える。第1回、第2回例会では同音整理が議題に上がり、放置されている現状を憂いつつも「各学会で興味のある人に願う」ことにしている。慣用音や漢音、呉音の別については次会以降に相談するとしながらそれ以降の会議録にはその話題が見えない。

1938年になって第10回日本医学会が医学用語調査委員会を設けて継続的に用語整理を行う旨の決議が行われ、各分科会の多元主義から日本医学会による一元主義への転換が図られることになった。それでも国語協会医学部会の活動が終わるわけではなく、翌月の例会で用語整理委員長の木下正中は漢字音の統一についての発表を行っている。その内容は「匙」「腔」「頭」「音」「膠」「臍」「泌」の如き、とあってそこに「楔」が含まれていたかは確認できない。それ以降は『国語運動』中での医学部会の記述は減少していった。

そして第11回医学会医学用語整理委員会が用語を選定し出版したのが1944年の『医学用語集第一次選定』である。「繊維」を「線維」とし、「體」「膽」に対する「体」「胆」などの略字を正式に認めたことなどの特徴があり、また読みづらい語、読み間違いやすい語には振り仮名をつけるという工夫をしている。これらは国語愛護同盟、国語協会の動きを反映したものである。用語はドイツ語のアルファベット順に配列され、振り仮名がつけられた用語はわずかである。この用語集で「楔」が用いられているのは「楔状軟骨」「楔部」「楔状束」「楔状骨」「楔前部」「楔形」「楔状」の7つであった。「楔」字には「楔形」にのみ「クサビ」の振り仮名、他の6つは「ケツ」の振り仮名があった。ここから音読みとしては「ケツ」に統一していると読み取ることができる。はじめの5つは解剖学用語であり、解剖学は以前から「ケツ」の読みを採用しているからそれを採用したのであろうが、それに合わせて「楔状」の「楔」を「ケツ」としたことが注意される。

国語施策に関していえば、1932年の標準漢字表に従うか否かは各学会にゆだねられていた。もっとも「楔」字は歴代の漢字表に掲載されていないため、掲載の有無よりも

19 例えば眼科では字形の複雑な漢字が近視の一因であるとして漢字の簡略化を提案する大西（1897）がある。解剖学では江戸・明治期以来の難しい漢語を平易なものに改めるなどした（「顛顛骨」→「側頭骨」など）。

表内にないことによって「楔」字の使用をどうするかということに影響がある。例えば、解剖学会は「漢字制限案の主旨を尊重」し、眼科学会は「必ずしも文部省案の漢字制限案には拠らなかった」²⁰という違いがあった。

5-2. 『医学用語辞典』

『医学用語集第一次選定』の後の動向はその後の1975年の『医学用語辞典』の「医学用語委員会の沿革」に概略がある。戦後作業が中断されたのち1952年に再開し、1955年に追加の整理案を各学会に配布した²¹。そして1961年に再び中断、1965年に再開して『医学用語辞典』を編纂した。その編集方針は基本的に当用漢字に従い、それ以外は略字に使用を認めたり、かな書きや言い換えを行ったりするとある。「楔」字は当用漢字外であるので「ケツ」の読みがかな書きでなされ、他の表記として「楔」字が括弧書きで添えられている。医学用語の標準化についてはその凡例に

各分科において頻繁に使用される語、重要な語、ないしは一定の系統上必要な用語などを採録したが、その最終的判定は原則として各分科委員に委せたため、その標準は一定していない。

という文がある。例えば、「楔」と訳される wedge の訳語についてみると pulmonary capillary wedge pressure に対する「くさび法肺毛細管圧」、wedge pressure に対する「楔入圧」、hepatic venous wedge pressure に対する「閉塞肝静脈圧」のように一定していない。この辞典の段階では医学用語の標準化が基本語のみに限定され、分科会ごとに用いられる語については標準化はできていないといえる。しかし、「楔」字の読みについては『医学用語集第一次選定』の「ケツ」を受け継いで統一されているのが注目される。

5-3. 『日本医学会医学用語辞典』

続いて『日本医学会医学用語辞典英和』が1991年、2001年、2007年に、『日本医学会医学用語辞典和英』が1994年に出版された。1991年の英和第1版は、1975年の『医学用語辞典』を引き継いで表外字についてはかな書きが主体である。1994年の和英という形式は、これまで独和または英和の形式であった医学用語辞典で初めてのことであり、日本語を五十音順に配列するために、用語の読みの問題を避けることはできなかった。「編纂にあたって」の中で、

漢字には二つ以上の読み方があり、人により、学会により異なる読み方が採用されているものが少なからずあります。これに対処するため、基本語については二つの読み方を採用し別個に見出し語とすることを原則といたしました。一方、複合語では複数の読み方のなかの一つを採用し、これを見出し語としました。他の読み方は

20 『日本医事新報』672, 2188-2189

21 この追加整理案は参照できなかった。

これを併記するにとどめ、この旨を基本語の項において記し、混乱のないようにいたしました。

とする。また凡例では「楔」字については「ケツ」の読みを優先したとしている。しかし実際の配列は「楔」字についてみる限り、「セツ」「ケツ」「くさび」の中で可能性のある読みを列記するのみで、混乱しているように見える。

2001年の英和第2版は第1版を引き継ぎつつ少し整理を行っている²²。そして2007年の第3版では優先する読みを「くさび」に変え、「楔」の読みを「ケツ」「くさび」の2つに絞ったという点で重要である。この第3版ではこれまで音読みされてきた「楔状」を含む語の読みがすべて「くさびじょう」に改められている。読みを大胆に変更したものの、各分科会との関わりはあまり考慮されていない。というのは各専門学会の用語集の中で電子化された1割ほどの用語集しか参照していないこと、また他の一般の用語集、用語辞典などを参照しながら統一にまで至っていないことがあるからである。

日本医学会は2013年に『医学用語辞典』の英和と和英を統合したWEB版を作成し、2014年からは一般に公開している。WEB版では要望を入力することができ、変更になった用語はホームページに掲載されるため、今後用語の改良が進むことが期待される。

5-4. 『学術用語集医学編』

2003年の『学術用語集医学編』は文部科学省と日本医学会の共編で、英和と和英からなる。和英はローマ字のアルファベット順配列という形式をとっている。日本医学会の編集する用語辞典と異なるのは、こちらの方が国民一般の使用を重視しているという点である。この性質から他の用語辞典に比べ「楔」字を含む用語の数は少ない。そして「楔」を含む用語のすべてが「楔状」という形をとり、その読みは「ケツ」「くさび」の2種類であった。「楔状」に「くさびじょう」という読みを設定したことが、4年後に出版された『医学用語辞典英和』第3版(2007)で「ケツ」から「くさび」へ優先を変更したことに影響を与えたのかもしれない。いずれにしてもこれまで日本医学会の編集する医学用語辞典で多様な読みの列記にとどまっていたものを、この『学術用語集医学編』を挟むことで標準化への関心が高まって読みが整理されたといえる。

広く学術用語の整理統一事業は戦後主に文部省によって行われてきた。これまでに自然科学、人文科学の各分野の学術用語集を編集している。その学術用語に使われる漢字の基準として、当用漢字表は使用上の注意事項で「専門用語については、この表を基準として、整理することが望ましい」としており、医学分野では当用漢字表に従うことに反対意見が強く出ていた²³。それでも1975年の『医学用語辞典』のように影響を受けていたことはうかがわれる。1981年の常用漢字表では前書きに「この表は、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個人々の表記にまで及ぼそうとするものではない」としており、また学術審議会学術用語分科会による「学術用語審査基準」(1992年改正)に

22 第1版で「ケツ」と「セツ」の両方の読みを載せていた用語は「ケツ」のみ、「ケツ」「くさび」の並列、「ケツ」「セツ」「くさび」の並列、のいずれかに変更されている。

23 青戸(1970:492)

は「各専門分野の事情に応じて、常用漢字表にない漢字を用いて表記することを妨げない」とある。このように表外漢字に対する縛りは緩和されている。これをふまえて『学術用語集医学編』では「例言」の中で、常用漢字以外でも学術用語にしたい漢字 266 字を列挙し、それをそのまま用語に用いたことが記されている。その中に「楔」字も含まれていた。2010 年に改訂された常用漢字表では前書きに「ただし、専門分野の語であっても、一般の社会生活と密接に関連する語の表記については、この表を参考とすることが望ましい」という文言が追加され、学術用語の中でも表に従うべき対象を明確にしている。医学分野でこれに該当するものは 2009 年の国立国語研究所の『「病院の言葉」を分かりやすく一工夫の提案一』であり、意識調査に基づいて用語の説明の仕方を公開している。こうした専門語と一般の語との間を埋める作業は医療の情報の伝達を間違いなく行っていくうえで必要なことである。これは直ちに用語集に反映されるものではないが、患者とのコミュニケーションにおいて使用される言葉に影響を与えていくものになると推察される。

5-5. 小括

日本医学会の医学用語標準化の動きは昭和初期に端を発し、国語改良運動の高まりとともに活発になり、『医学用語集第一次選定』（1944）として結実した。用語の読みに関する議論も活発であり、読みの標準化が明確にはかられたことが重要である。この成果は各専門学会の範となるように意識されたものであったが、収録される語が限定されたものであるという問題があった。これが顕在化したのが『医学用語辞典』（1975）で、最終判定は専門学会に任せるとしている。しかし、読みについては『医学用語集第一次選定』のものを受け継いでおり、統一された状態であった。『日本医学会医学用語辞典英和』（1991）に至ると用語が着実に増加してきて「楔」字の読みも多様なまま配列するようになってしまった。続く『日本医学会医学用語辞典和英』（1994）を出版するにあたっては、日本語の読みの順番で配列する必要があることから、用語の読みに優先順位をつけるということがなされるようになった。これ以降の英和の第 2 版（2001）、第 3 版（2007）も同様である。『学術用語集医学編』は文部科学省との共編で国民一般の理解を意識したものとなり、従来のものとは異なる読みも示された。『日本医学会医学用語辞典』第 3 版（2007）はこれをふまえてか大幅に「楔」関連語の読みを変更しているが、これまでの読みと断絶があるため、普及するかどうかは不明である。このような変遷の中でいえることは、昭和初期のような高まりの中で出された用語集は標準化が強く打ち出されていたが、それ以降はすべての用語を包括するという困難さのために強い標準化を打ち出せていないということである。これには現状の把握の不足と標準化の動きを各専門学会へ普及させる方向の弱さも原因にあると考えられる。

6. 各用語と専門学会

医学用語を実際に使用する立場に近い各専門学会は、実際の使用という面から医学用語に影響を与える。ここでは各用語とそれを使用する各専門学会の関連を探り、各専門学会内あるいは専門学会間の標準化への姿勢およびその効果に関して考察する。3. 各

専門学会の用語集の「楔」では各専門学会を同列に扱ったが、学会によって用語に対する姿勢は異なる。用語の標準化、統一を明確に目指すもの（解剖学や産科婦人科学）もあれば、標準化への姿勢が読み取りにくいもの（呼吸器学など）もある。用語の読みの多様性と標準化は、用語それぞれの事情と各学会の用語に対する姿勢によるものが大きい。「楔」字を含む用語は「楔状」または「楔入」の形を含むものがほとんどであった。そのため用語を「楔状」「楔入」の2つに大きく分けて、それぞれについてどのように各専門学会で扱われてきたかを見ていく。

6-1. 楔状

「楔」を含む医学用語のほとんどが「楔状」という形をとる。「楔状」の用語をさらに大きく分けると「楔状骨」「楔状束」をはじめとする解剖学用語、そして「楔状切除」「楔状骨切り術」などの臨床用語に分けられる。解剖学用語は「ケツ」でほぼ一定であるのに対し臨床用語は「ケツ」「セツ」「くさび」など多様である²⁴。「楔状」という語そのものについて、および「楔状骨」と解剖学会、「楔状切除」と産科婦人科学会の関連についてそれぞれ考察する。

(1) 楔状の読み

「楔状」の初出は『日本国語大辞典』(2002)によると1881年の『五国対照兵語字書』²⁵とされているが、複合語の一部としてならば、医学教科書において表7にあるようにこれより古い用例が見られる。まずこの語が中国にあるものを借用したのか否かを見るために、中国の文献に「楔状」の語が出現するかを中国基本古籍庫を用いて調べた。「楔状」という文字列が現れるものは『儀礼集説』『礼経本義』『儀礼正義』『儀礼集編』『読礼通考』の5つであった。『儀礼集説』が元代、他の4つは清代のもので、いずれも『儀礼』の「楔貌」という部分に対する注釈「楔状類之」で登場する。ここでは「楔状」という一語で使用されているととることは難しく、そのため「楔状」という語は *cuneiform* などの外国語を翻訳した時にできた語と推察される。

「状」は接辞性の字音語基である²⁶。これは結合形全体を形容動詞の語幹相当の性格に変える特徴を持ち、「～状ノ」という形で体言を修飾することが多いとされる。またこういった接辞性字音語基は幕末から明治にかけて大きく発達したもので漢語の大量生産と関係があるという。『重訂解体新書』(1826)の「楔骨」が「楔状骨」になった『解剖訓蒙』(1872)や『解剖摘要』(1876)では、「棘尖」から「棘状突起」、「舟様骨」から「舟状骨」へというように「状」を使う語に変化しているものがある。またその『重訂解体新書』でも『解体新書』との比較において「甲状軟骨」や「乳嘴状神経膜」などの「状」を含む語が出現しており、この時期に徐々に増えていったものと思われる。

24 『医学用語読み方辞典』(1998)では「楔」字を例に挙げて、解剖用語と臨床用語で読みが違うものがあるとする。標準化を打ち出す解剖学用語が臨床用語まで浸透していないということであろう。ただ、臨床用語といっても分野の中でかなり異なっているために、一概に解剖と臨床とで二分して述べられるものではない。

25 英語では *cuneiform* に対応しており、「楔状ノ、又尖角状ノ」と書かれている。

26 野村(1978)

「楔状」は音読みされる以外に「くさびじょう」というように湯桶読み²⁷で読まれることがあった（『眼科用語集』（1988）『内科学用語集』（1998）など）。「状」は前に音だけでなく訓も置くことができる（樽（たる）状胸など）。小川ら（2006）の「医学生を悩ます漢字の読みの多様性」には、まさに「楔」字を例に挙げてこのことに触れる。

「楔状の」とか「楔形の」というときは「くさび」状、「くさび」形というのに、三字・四字熟語になると重箱読み〔ママ〕を嫌い、楔状骨、楔状束、楔状〔楔形〕文字などでは「ケツ」と慣用読みされる

とある。このように「～状」という語のうち、「～状の」という場合と被修飾語と合わさって一語になる場合とで読みが湯桶読みか音読みかというように分かれるものがある。一方どちらの場合も音読みであるもの（「冠状」など）も、どちらの場合も訓読みであるもの（「樽状」など）もある。かなであって音訓の別のないもの（「カリフラワー状」など）もある。湯桶読みになるものを『日本医学会医学用語辞典英和』第3版で「～状の」という形をとる語で調べたところ、8語のみ（带状、梨状、楔状、篩状、粥状、渦状、泡状、犬耳状）であった。ほか、音読みは38語、かなであったものは7語であった。かなになっているものの中には「とげ状」「なし状」のように漢字だったものをかなにしているものが見受けられた。湯桶読みの8語のうち、後に被修飾語がついても依然として湯桶読みのままのものは「泡状肺（あわじょうはい）」1語のみであった。数は少ないがこのように変化する語がほとんどであることから、「～状の」という場合は「～」にあたる語の様相に重きが置かれるために湯桶読みになり、後に被修飾語がつく場合は合わせて一語としてとらえられ、音読みされやすかったということが考えられる²⁸。「楔状」が湯桶読みされるということは国語辞典には見えず一般的な読みではないようであるが、

27 湯桶読みのような和語と漢語の混種語が医学用語のうちどれほどの割合を占めるのかを『日本医学会医学用語辞典英和』（1994）の「あ」から始まる1243語から調べた。うち和語+漢語のものは59語（4.7%）、漢語+和語のものは8語（0.6%）のみであった。和語のみは54語（4.3%）あった。一方、アルファベットや外来語を含む語は779語（62.6%）と半数を占めており、医学用語における英語などの影響力と、それらを日本語へと訳しきれていないことがうかがえる結果であった。カタカナ語と漢語の混種語も多数あり（「アミロイド腎」「亜ショック」など）、形態素ごとに訳していく模倣法が現在でも行われていることがわかる。混種語もこの訳語作成法の産物として位置付けることができる。日向（1987：39）によると『医語類聚』（1878）における漢語語基は87%、和語語基は5.9%であって、他の分野と比較して和語語基の割合が低いことが述べられる。語基と語で単純には比較できないが、現代では外来語語基の割合が格段と増し、和語語基も少し増えている、漢語語基は相対的にその割合が減少している。混種語はその中ですべての形態素が漢語語基に対応させられなかった場合に生まれるものであると考えられる。

28 学術用語の中には分野によって和語の多いものとそうでないものがある。森岡（1969）によれば、学術用語において漢語の占める割合は非常に多いが、物理学では漢語による造語より従来から用いられてきた和語を用いる傾向が強く、哲学では中国語からの借用による漢語の割合が圧倒的に高い。

医学用語辞典では表 8 にある『対照独英和医語新辞典』(1950) 以降に見られた²⁹。下瀬(1941) では

もともと和語系統の言葉であるものに漢語らしい外形を与えたものも多いのです。が、それを音読されては全く意味を失ふことになるので、或物はカナガキに改め、少くともそれに振仮名を施すことになって来たのであります。

として、「楔状」を例にとり「音読ではなく、すべてなだらかに和読さるべきものがあります」とする。しかし 1944 年の『医学用語集第一次選定』では「楔状」に「ケツ」の振り仮名があって、国語愛護同盟の中心人物である下瀬の意見がそのまま反映されたわけではない。しかしこのような意見が出ていたことも背景にあって「くさびじょう」という湯桶読みが出現し、普及していったのではないかと考えられる。

(2) 楔状骨—解剖学

蘭学期から明治期の「楔状骨」の出現状況については前に述べたので、ここでは「楔状骨」の読みと解剖学会との関係を中心に考察する。表 8~10 ですでに見たように現在の「楔状骨」の読みは「ケツジョウコツ」でおおむね統一されていた。『日本医学会医学用語辞典英和』第 3 版(2007) は例外的なもので「くさび」の読みを採用している。今後この読みの転換がどのように影響を与えていくかはわからない。ともかく医学分野では「ケツ」の読みが優勢であり、特に戦後は「ケツ」でほぼ定着してきたのは、この語を用いる解剖学が医学の基本的な学問であり、また解剖学会が用語について早期から統一の動きを見せていたことが大きいと思われる。解剖学上で「楔」字が用いられる用語は、足の骨である「楔状骨」と、隣り合う骨との関節の語、喉にある「楔状軟骨」、神経系の一部である「楔状束」「楔状束核」「楔部」「楔前部」が主なものである。これらの用語の中の「楔」はどの辞典の中でもそれぞれで統一した読み方をされている。

明治期から医学用語辞典や医学教科書とともに解剖学用語を集めた用語集が早くから作られた。その最初期のもは大野九十九『解体学語箋』(1871) で「楔状骨」はなく「蝴蝶骨」「三稜骨」という訳語を使用している。明治期の解剖学書は表 7 のように多く出版されているが、広く用いられたのは『解剖訓蒙』(1872) の用語のようである³⁰。明治期の医学用語は影響力のある書籍によって標準的な用語が学ばれたということであったが、1893 年の解剖学会は第 1 回から解剖学用語の統一を課題としていた。その中で西洋の解剖学用語に関する協定を翻訳した鈴木文太郎『解剖学名彙』(1905) は版を重ねており、改訂 16 版からはこれに解剖学会が関与するようになった³¹。この『解剖学名彙』の用語に読みが付されるようになったのは 1932 年の改訂 17 版からで、表 8 にあるとおり「ケツ」の読みを載せる。『医学用語集第一次選定』と同時期に作業が行われ

29 高野(2004) の中で 1878 年の『医語類聚』の語基について考察されており、「櫛状」「帯状」が和語・混種語語基に分類されている。『医語類聚』には振り仮名がほとんどなく、これらが音読みされていたか湯桶読みされていたかは不明である。

30 澤井ら(2010: 40)

31 木村(2008: 133)

た1944年の『解剖学用語』初版³²でも「ケツ」であり、以降現行の改訂13版(2007年)まで変わらない。

解剖学は西洋医学の中でも早期に日本に導入され、また医学の基本となるものである。そのためその用語は他の分野も使用することになり解剖学用語の持つ影響力は大きい。1932年の解剖学会総会では『解剖学名彙』第17版(1932)を他の分科会に寄贈して「一般学者ヲシテ之ヲ用ヒシムベク努ムベキ」とし、また1937年の総会では国語愛護同盟医学部会に対して「解剖学会撰定ノ解剖学用語ヲ常ニ考慮使用サレルヤウ他科学会ニオススメ願ヒタシ³³」と希望をだすなど、積極的にその用語を広めようとしている。1944年の『医学用語集第一次選定』が『解剖学用語』初版の時期と重なったためか、「ケツ」の読みが付されたことも大きい。このように解剖学が医学に占める地位、そして『解剖学名彙』第17版以来一貫して「ケツ」の読みを採用していることにより、「楔」字の数ある読みの中でも「ケツ」の読みと一層結びつきやすくする要因となっていると考えられる。

「ケツ」以外の読みとしては、『日本国語大辞典』(2002)が「楔状骨」を「セツジョウコツ」の読みで掲載している。用例には1884年の『生物学語彙』を挙げているが、『生物学語彙』には読みが示されていない。「セツ」と読むものは1930年の『現代医学大辞典』があるが、この読みは江戸時代の解剖学書、明治期の辞典、医学教科書にも見えないものである。解剖学会の統一の動きとは別に慣用的な読みが残っていたことがうかがわれるが、少なくとも医学分野において一般的な読みではない。

(3) 楔状切除—産科婦人科学

「楔状切除」は胸部外科、産科婦人科、形成外科、小児外科など外科系の用語集に現れるが、「ケツ」「セツ」「ケイ」と読みが一致しない。また「楔形切除」というものもあってこの場合の「楔」字は「くさび」と読まれていた。「楔状骨」では「セツ」という読みを採用する医学用語辞典がほとんど見られなかったのに対し、「楔状切除」では「セツ」を採用するか「ケツ」と併記する用語集が見受けられる。この状況は「楔状椎」「楔状骨切り術」のような「楔状」を含む別の語にも同様に見られることである。「楔状骨」と異なるのは、「楔状切除」の「楔状」が「楔形」とも書かれていたのが一因と考えられる。「楔状切除」については学会の用語に対する取り組みが長い産科婦人科学会を中心に考察していく(表11)。

産科婦人科学会は戦前から用語問題に関心を持って取り組んでおり、学会内での用語の統一はほぼ100%に近いという(『産科婦人科用語集』第4版序)。最初期の医学用語整理委員長の木下正中も産科婦人科であった。現行の用語集では「楔」を「ケツ」と読ませているが、歴史的には「楔状(セツジョウ)」から「楔形(くさびがた)」、そして「楔状(ケツジョウ)」に至る。同じ読みをさせてきた解剖学会とは対照的に、産科婦人科学会は国語施策や学会間の統一ということに対して柔軟な態度をとってきた。

戦前の「楔状切除」を掲載する資料は調べた中では『独羅和訳医語新字典』(1905)の「楔

32 なおこの『解剖学用語』初版で頭部の「楔状骨」が「蝶形骨」に変更されている。

33 『日本解剖学会百年のあゆみ』(1995) pp. 52-53.

状切除法」(読みなし)と『日独羅医語字典』(1934)の「楔状切除術」(読みケツ)だけであった。1934年の『産科学婦人科学学術用語彙』は参照できなかったが、それ以降の産科婦人科の用語集の冒頭に「産科婦人科用語集の沿革」という文章があり、それによるとこの第1版では「楔状切除」の「楔」は「セツ」と読まれていたことがわかる。直接参照できる中で最も古かったのは1936年の『産科学婦人科学学術用語彙』第2版で「クサビガタ切除」という項目が載っている。これについて木下正中は雑誌『国語運動』で「日本婦人科学会ノ学術用語統一事業」として解説を加えており、「楔形切除」について『クサビガタ』ト読ム。「セッケイ」マタハ「ケッケイ」トハ読マヌ』とし、『楔形ヲ用イテ「クサビガタ」ト読ムコトニシタノモ書キ易イタメト聞キトリ易イタメトデアル』としている。これ以前に「セツ」以外に「ケツ」の読みが行われていたことがうかがわれる。当時の国語関連の運動の盛り上がり、聞いてわかる用語ということに力点が置かれていることからの変更ということになる。この用語は1966年の『産科婦人科用語集』第2版にも「くさび形切除」という形で受け継がれている。この間には『医学用語集第一次選定』の発行があり、「楔状」の項があって「ケツ」の振り仮名があるが、産科婦人科ではこれを直ちに適用しなかった。そのほか一般の用語については『医学用語集第一次選定』の用語をすべて使用するべきという方針をとっていた³⁴。1983年の第3版に至って「くさび形切除」から「楔状(ケツジョウ)切除」への変更が示された。第3版の編集方針に『医学用語辞典』および『解剖学用語』に従うとあり、1975年の『医学用語辞典』が「楔」の読みを「ケツ」で統一して掲載したことによる変更である。これ以降は現在まで「ケツ」の読みで一定している³⁵。2003年の『学術用語集医学編』では「ケツ」の読みを与えているが、2007年の『日本医学会医学用語辞典英和』第3版では「くさび」の読みが優先されている。しかしこの「くさび」の読みはまだ学会で取り入れていないようである。直後の2008年の『産科婦人科用語集・用語解説集』改訂第2版では依然「ケツ」の読みで掲載しており、2013年の改訂第3版でも同様である。

産科婦人科領域の「楔」字の読みは、国語運動や用語の統一の動きに対して変化し、「セツ」「くさび」という読みや語の変化を経て、現在は「ケツ」の読みとなり「楔状骨」と読みが一致している状況である。戦前に「楔状」に対して「セツ」の読みがどれほど使用されていたかは判然としないが、「セツ」の読みが今日も内視鏡外科や整形外科、形成外科の用語集に残っている理由として「楔形」という形が過去に使用されてきたことがあると考えられる。「楔形」は一般にはほとんど「楔形文字」の一部として使われる語であるが、表1、表2のとおり、『総合漢和辞典』(1939)は「ケツ」「セツ」の両方を挙げ、『言泉』(1922)は「楔状文字」と「楔形文字」を掲げるなど、語の読みも形式も不統一な状態であった。そして「楔形文字」に訓読みが登場してきたのは戦後か

34 木下 (1946: 8)

35 「卵巣楔状切除術」だけは「楔状切除術」と異なった読みがなされることがあった。『日本医学会医学用語辞典英和』第1版(1991)、『日本医学会医学用語辞典和英』(1994)では、「楔状切除術」の部分が共通しているが卵巣の方には「くさび」の読みを与えられている。産科婦人科の用語集で「ケツ」の読みに統一した後にこういったことが起こっている理由は不明である。

らだった。現在では「楔形文字」と書いて「楔」字を「くさび」と訓読みし、音読みする場合は「セツ」となることは表4のとおりである。楔形文字 Cuneiform に対する訳語に「楔状」ではなく「楔形」を用いることは植物学でも見られるもので³⁶、両者は原語からしてみれば交換可能である。「楔状」「楔形」の2つの訳語が存在しうるので、「楔状」よりも一般的な「楔形」を一時的でも用語に取り入れたことで、一般においても読みの定まらない「楔形」の読みの事情が用語にも反映されるようになったのではないかと考えられる。整形外科などの「セツ」の読みは、そのような状況で解剖学会のような強力な統一事業が行われなかったために残存していると推測する。

6-2. 楔入

「楔入」は wedge の訳語として使われ、医学雑誌で「楔入する」のように動詞で使われたり、「楔入」という名詞で使われたり³⁷、また用語の一部として使われたりする。「楔入」という語はそもそも用例が少なく兵語辞書を含めて辞書類に載ることのなかった語であった。確認できる新聞記事の用例で最も古かったのは大阪毎日新聞の1939年6月30日付のものであった。中国基本古籍庫で「楔入」という文字列が現れるものに『六書故』『無夢園初集』『輪寥館集』『忠貞録』『弁州山人四部統稿』『説文解字注』『退庵隨筆』『説文通訓定声』の8つがあった。「楔入」については、南宋の『六書故』で「穿」字の説明に「楔入也」としており、「楔入」がまとまりで使われていることが確認できる。また清の『説文解字注』では「則斫木札楔入固之³⁸」という箇所があり、「楔入」がここでも一語として読まれている。『説文通訓定声』も同様で、以上3つの文献で「楔入」が一語として使われていた。他の5つについては「綽楔」「棹楔」など「楔」字が前の字と合わせて使われているものであった。医学書というわけではないが、「楔入」が一語として使われていた3つの文献はいずれも日本に伝わっている本であるので、これらを参照したという可能性は否定できない。しかし、この語がいつ頃どのように使われたのかを特定することはできなかった。

医学用語以外では読売新聞1941年9月26日朝刊「楔入作戦奏功 敵両断さる」や同1943年2月13日夕刊「独軍の反撃いよいよ熾烈 ドネツ地区赤軍陣深く楔入」など軍事という限られた場面において、「楔状突破」「楔を打ち込む」という意味で「楔入」という語は見られる³⁹。しかし「楔入」は『日本国語大辞典』(2002)を含め種々の国語辞典に載っていなかった。また『大漢和辞典』(1960)をはじめ種々の漢和辞典の「楔」

36 『学術用語集植物学編』増訂版(1990)には Cuneate、Cuneiform に対して「くさび形」をあてる。『植物学語鈔』(1886)では「楔形」を「くさびなり」「セッケイ」と読ませている。また植物学における「楔」字として、『和英独植物学用語新辞典』(1929)で「楔葉類」に「キツヨウルイ」という読みを与えており、「キツ」という読みが見られることが注意される。

37 動詞の例として鍵山ら(2006)に「冠動脈造影検査中に円錐動脈に楔入し、胸部誘導にてST上昇を認めた1例」、名詞の例として山本ら(2011)に「バルーンを膨らませて肺動脈への楔入を試みたが、楔入できず」がある。

38 『訓読説文解字注』(1989)によると「則ち木札を斫り楔入して之を固む」とある。説文解字注の「櫛」字の項にある。

39 ただしこれら記事には「楔入」の読みは示されていない

項の用例にも掲載はなかった。医学分野における「楔入」を含む語は、他の訳語との揺れが顕著であるという点でも「楔状」を含む用語とは異なっている。これは辞典類に載っていなかったためにどの読みで読むのが妥当であるかという基準がなかったためだと推察される。

「楔入」を用いる用語には「楔入圧」と「楔入胎盤」があり、「楔入圧」と関連諸分野、「楔入胎盤」と産科婦人科学についてそれぞれ考察する。

(1) 楔入圧

「楔入圧」の「楔」の読みは内科学、集中治療学、医学放射線科学で「ケツ」、循環器科、麻酔科で「セツ」、呼吸器学で「ケイ」とばらばらであった⁴⁰。呼吸器学会の前身である胸部疾患学会の用語集では「楔入圧」を「キツ」で配列していた。『麻酔科学用語集』(2002)で「キツニュウアツ」という読みを除外していたことはすでに述べたとおりである。すると以上4種類の読みが用語集に載っていたことになる。「楔入圧」という用語は読みが多様であるだけでなく、同義の用語が複数あって、その間の揺れもあり複雑な様相を呈していた。読みの変遷について表12にまとめた。

「楔入圧」はカテーテルを肺動脈に挿入して計測された圧のことである。肺動脈「楔入圧」の初出と思われるものは三瀬淳一が1954年に日本循環器学会で報告した「所謂肺毛細管圧(1)」である。カテーテルを肺動脈の末梢に wedge して計測した圧が肺毛細管圧に近いとして当時これが「所謂肺毛細管圧」と呼ばれていた。ただ当時このカテーテルによって計測された圧が肺のどの部分の圧を示すものかということに関して議論があった。三瀬は「所謂肺毛細管圧」の原語と同義であり、そしてこれ以外で最も多く用いられている wedge pressure を「楔入圧」と訳している。注意すべきなのはそこで「楔」字にわざわざ「ケツ」と振り仮名を振っていることである。その直後の1955年時点の状況は藤本ら(1955)によると、三瀬に従い「楔入圧」という語が使われたり、「閉塞圧」の語が使用されたりしており、また「肺毛細管圧」の語も一般に使用されているという。この藤本ら(1955)では「肺毛細管圧」という語が適当でないことを述べたうえで「楔入圧」の語を使用している。これは「肺毛細管圧」の語で示される圧(「肺動脈楔入圧」)が肺毛細管の圧ではなく肺小静脈圧であるという三瀬の理論によっている。肺のどの部分の圧を反映しているかによる名称ではなく、計測方法による名称を採用することで混

40 読み方が最も多様であった「楔入圧」について、筆者が医師に聞いてみたものでは、循環器学の中では「セツ」「ケツ」の読みがあり、「キツ」と読む人もあるということがうかがわれた。どれが正しいかという「セツ」であるという認識を持つ人が複数いた。呼吸器学でも「キツ」「セツ」などの意見が聞かれ、『呼吸器学用語集』(2006)に掲載されている読みとは異なっていた。「楔入圧」と言わずに「ウェッジ」ということも多かった。

「セツ」と読ませるものの例として医学雑誌に中田(2009)「難解用語のこれがよく分からん4 肺動脈楔入圧(はいどうみゃくせつにゅうあつ)」がある。

また、辞典では見出しがたい「キツ」の読みは、一般社団法人京都府臨床工学技士会ニュース2012年3月号8面に「ウエッジ(wedge: 楔入【きつにゅう・せつにゅう】)といます。」とあり、現に行われている読みであることがわかる。喫煙の「喫」からの類推であるという意見も聞かれた。

乱を避けようとしたのであろう。また、この「肺動脈楔入圧」と「肺毛細管圧」が常に同一のものではないということについて、宮本（1958）では、肺動脈楔入圧が肺毛細管圧を表すものであるとして受け入れられたとしており、肺が高度の萎縮硬化を示した場合には、カテーテルを肺の小動脈に楔入することができないために肺動脈楔入圧が肺毛細管圧を示さないとする。

しかしこのようないきさつがありながら、1960年の『内科学用語集』第2版では wedge pressure に対して「押し込み圧」という語をあてるのみである。1964年の『南山堂医学大辞典』第10版でようやく「肺楔入圧」の語で掲出があり、「楔」の読みは「ケツ」であった。1968年の『常用医語事典』にも「肺楔入圧」の項があるが、配列が五十音順でなく読みも示されていないため不明である。そして、1975年の『医学用語辞典』が学会のものとして初めて「楔入圧」を掲出した。しかし『日本医学会医学用語辞典英和』第1版（1991）では「セツ」「ケツ」、第2版（2001）と第3版（2007）では「ケツ」、『日本医学会医学用語辞典和英』（1994）では「セツ」と読みが揺れている。各専門学会のものでは1995年の『循環器学用語集』の初版の「肺動脈毛細管圧」が2008年の第3版で「肺動脈楔入圧」になっている。ほかに一般の用語辞典でも、『医学用語シソーラス』で「肺楔入圧」が現れるのは1999年の第4版から、『南山堂医学大辞典』では1998年の第18版になく、2006年の第19版ではじめて「肺動脈楔入圧」が現れる。

このように用語ができてから日本医学会や各専門学会の用語集に掲載されるまでに時間がかかっており、その間に臨床の場で定着しながら多様な読みも行われるようになったのだろう。これに加えて標準となるはずの『日本医学会医学用語辞典』の示す読みが揺れている状況であった。辞書、辞典類に載っていないために、どの読みが正しいのか決めかねたところもあるであろうが、この語の「楔」字の読みが最も多様であるのもこうした理由によるものと思われる。

なお wedge pressure の訳語として「楔入圧」が使われうる用語にもうひとつ「肝静脈楔入圧」がある。これは『日本医学会医学用語辞典』に掲載されているが、『消化器学用語集』（1996）では「閉塞肝静脈圧」となっており、こちらはまだ用語の統一がなされていないようである。

（2）楔入胎盤—産科婦人科学

日本医学会の用語辞典にも各専門学会の用語集にも載っていないが、一般の医学用語辞典や産科婦人科の教科書等には載っている「楔入胎盤」という用語がある。原語は placenta accreta で日本医学会や産科婦人科学の用語辞典では「癒着胎盤」という訳語になっている。

癒着胎盤とは、「胎盤の絨毛が子宮筋層内に侵入し、胎盤の一部または全部が子宮壁に強く癒着して、胎盤の剝離が困難なもの」（『産科婦人科用語集・用語解説集』改訂第3版（2013））で、その癒着の程度による下位分類がある。産科婦人科の用語集では①（狭義の）癒着胎盤、②嵌入胎盤、③穿入胎盤の3つに分けるが、一部の教科書では①楔入胎盤、②嵌入胎盤、③穿通胎盤（または穿入胎盤）の3つになっている。①の原語はいずれも placenta accreta であるので「楔入胎盤」とはすなわち「（狭義の）癒着胎盤」ということであるが、上位概念である（広義の）「癒着胎盤」の原語も placenta accreta で

ある。「楔入胎盤」は用語集に載せる用語としては認められていないものの、「癒着胎盤」に広義と狭義の区別があるためか、胎盤への軽度の侵入を形容するために「楔」字を使用した用語を作ったと考えられる。

「楔入胎盤」の初出と思われるものは1961年の藤森速水『産科学異常篇』で、癒着胎盤の下位分類3つを挙げている。索引の配列から見て「楔入」の読みは「ケイニュー」としているようである。癒着胎盤に関する日本語の論文は癒着胎盤自体の頻度の少なから報告が少なく、1930年代から1961年の『産科学異常篇』までの間に数えるほどしかない。『産科学異常篇』は序の中で「従来の学説や手技に、アメリカ流の事項を加味」と述べており、教科書を作る段階で新たに訳語を作成した可能性が高い。癒着胎盤を癒着の程度により3つに分けること自体はこの『産科学異常篇』以前にも行われており、例えば1951年の真柄正直『最新産科学異常篇』第3版では、①軽度の癒着のみのもの、②胎盤絨毛が子宮筋層内に侵入するもの、③胎盤絨毛が子宮漿膜にまで達するもの、の3つに分類する。各教科書によるとこの分類は1945年のKaltreiderの論文⁴¹に基づくとされている。1961年以降は次第に『産科学異常篇』の使った訳語が定着していった。

「楔入」の語は前述のように一般的な語とはいえず、軍事用語で少数の例が見られるに過ぎない。この語を訳語に採用した理由として、直前に作られた「楔入圧」の語の影響も考えられる。「楔入圧」は1954年に訳出されたが、辞典類に見えるようになるのは1964年以降であり、「楔入胎盤」の初出1961年時点ではまだ論文で使われだした時期であって、その読みも「ケツニュー」と「ケイニュー」と2通りがあった。そのため、「楔入胎盤」の語を作成するにあたって「楔入圧」を参考にしたのか、軍事用語を参考にしたのかは断定できない。

その後の「楔入」の読みはばらばらである。1971年の『新産科学』第2版では「ケツ」としているが、「セツ」という読みも行われるようになった。これには「楔入圧」の影響も考えられる。読みに「ケツ」を採用したのは『新産科学』(1983)、『産科学』(1984)、『標準産科婦人科学』(1984)など、「セツ」を採用したのは『南山堂医学大辞典』第19版(2006)、『必修産婦人科学』(1991)、『標準産科婦人科学』第2版(1999)、同第3版(2004)などであった⁴²。『標準産科婦人科学』は第2版から読みを「ケツ」から「セツ」に変更しているが、その理由は示されておらず不明である。しかし『南山堂医学大辞典』などの一般の用語辞典が「セツ」と読み、また「ケツ」から「セツ」へ変更する教科書があったのであるから、現在は「セツ」が有力な読みであるといえる。下位分類に関しては1つの教科書の中でもページによって訳語が異なるということがあった⁴³。『産科婦人科学用語集・用語解説集』で「癒着胎盤」の定義と下位分類が示されながら改まらないところを見ると、今後も「(狭義の)癒着胎盤」が使われ続ける可能性は高いと思われる。

41 Kaltreider (1945) による。1950年代の教科書は主にこれに言及しているが、この分類は少しさかのぼって Irving and Hertig (1937) によるものである。

42 これら教科書もこれまで見た用語集などと同様に読みがなを付すことはまれであるので、索引で判明する分のみを挙げた。

43 『標準産科婦人科学』第3版のp. 356とp. 534では「楔入胎盤」、p. 485とp. 498では「(狭義の)癒着胎盤」となっている。

7. おわりに

「楔」という字はこれといった定まった音読みがないために一般の語でも専門用語でも標準化がなされにくく、今まで読みが一定していなかった。「楔状」「楔形」という語は音読みでも訓読みでも許容されるため、現在でも辞典では複数の読みを掲出している。さらには過去の新聞記事の振り仮名では慣用音が行われ複雑になっていた。医学分野でも同様にさまざまな読みが行われ、現在でも複数の読みが用語集の上でも実際の現場、一病院の一診療科の中でさえ併存している。

これまで標準化が難しかったのは上記の複雑さ以外に医学分野の事情もあった。蘭学期から明治期にかけて用語が形成される時期には用語の読みが示されることがほとんどなかった。昭和初期からは標準化の動きが極めて活発になった時期であり、その効果もあったと考えられる。しかし戦後は中断があるなどして標準化の動きは弱まり、各専門学会への影響力も小さくなってしまっていた。読みの標準化に関しても多様な読みを列挙するところから、優先する読みを提示するようになったものの、それが各専門学会にまで浸透するには至っていない。各用語についてみると、「楔状」に関しては、「ケツ」の読みを貫く解剖学と、耳で聞いてわかる読みである「くさび」と音読み「ケツ」「セツ」の間で揺れる日本医学会の標準化の問題がある。前者について、一般でも読みが揺れる中で「ケツ」の読みを貫いたことは、狭い範囲でも標準化が達成されているものとして評価できる。後者については、例えば「楔状」の「楔」の読みを「ケツ」や「セツ」のどちらかで統一すると「血状（ケツジョウ）奇胎」「雪状（セツジョウ）炭酸」などの同音語が存在することになってしまうという問題もある。しかしそれでも各専門学会に影響力を与えられるように一貫した態度を示すことが必要となってくるであろう。また「楔入」に関しては、比較的新しい言葉であって辞書類にも記載がなく、訳語の統一も読み方の面でも標準化が遅れ、それぞれの分野での慣習となっている音が定着しているという問題がある。『日本医学会医学用語辞典英和』第3版（2007）の編集方針にあるように、各専門学会の用語集は技術的な制約からごく一部のものしか参照できておらず、また『学術用語集医学編』（2003）などのほかの用語集との関連についても今後の課題とされている。それ以外にも、各学会や日本医学会の医学用語辞典、用語集があまり各医療関係者に参照されていなかったり、相手に通じればよいとして日本語の用語に関心を示さない人がいたりするということもあるだろう。

多様性を放置するのではなく読みの標準化を今後行っていくのならば、「楔状」に関しては、解剖学を尊重した「ケツ」への統一、もしくは音声を重視した「くさび」の並立を、「楔入」に関しては訳者の意向に戻りまた解剖学とも共通する「ケツ」か、現行の中で多い「セツ」かのどちらかに統一をしていくべきであると考え。その点に関して2007年の『日本医学会医学用語辞典英和』第3版が「くさび」の読みを優先とするとして、多くの用語の読みを変更しすぎたきらいがある。今後各専門学会にどう取り入れられていくかに注視が必要となる。

医学用語は文章や診療録などで用いられるだけでなく、医療関係者同士あるいは医療関係者と患者との間で音声として伝達されるものでもある。表記を統一してもその読み方にまでも踏み込まなければ標準化は途上と言わざるを得ない。昭和初期の国語関連の

運動の流れで音声を重視した用語改革がなされようとしたが、計画で終わってしまったものも多かった。この問題は現在でも残されたままである。医療関係者同士の専門的な言葉は各学会で用語を統一しつつ、できればその読みまでも明記した用語集を作成していくこと、そしてその用語集の用語を分野内に周知することがまず大切だと考えられる。そのうえで日本医学会がすべての専門学会の用語集を参照して、用語の統一を図ることが必要である。その用語は国語施策に縛られすぎてもいけないが、「楔」のように類推読みが多く見られること、また学生にとって学習上の負担となることを考えると難しすぎる語は今後も言い換えが必要となってくるであろう。

以上、「楔」字に注目して日本語医学用語の読みの多様性とその標準化について見てきた。触れられなかった医学分野のほかの漢字音、ほかの学術分野との関係性、および中国の学術用語との関係などが今後の課題となる。

〔参考文献〕

・医学用語辞典類

- 医学用語研究会編（1998）『医学用語読み方辞典』ユリシス出版
大野九十九編（1871）『解体学語箋』文部省
緒方知三郎編（1968）『常用医語事典』金原出版
奥山虎章編（1878）『医語類聚』名山閣
解剖学用語委員会編（2007）『解剖学用語』改訂13版 医学書院
唐澤由美子監修（2009）『早引き看護・医学略語辞典』第2版 ナツメ社
鈴木文太郎編（1905）『解剖学名彙』丸善
鈴木文太郎編（1932）『解剖学名彙』第17版 丸善
第十一回日本医学会医学用語整理委員会編（1944）『医学用語集第一次選定』南山堂書店
日本医学会医学用語委員会編（1975）『医学用語辞典』南山堂
日本医学会医学用語管理委員会編（1991）『日本医学会医学用語辞典英和』南山堂
日本医学会医学用語管理委員会編（1994）『日本医学会医学用語辞典和英』南山堂
日本医学会医学用語管理委員会編（2001）『日本医学会医学用語辞典英和』第2版 南山堂
日本医学会医学用語管理委員会編（2007）『日本医学会医学用語辞典英和』第3版 南山堂
日本医学教育学会医学医療教育用語辞典編集委員会編（2003）『医学医療教育用語辞典』
照林社
日本医学放射線科学会編（2002）『放射線診療用語集』改訂第3版 金原出版
日本医真菌学会編（1999）『医真菌学用語集：英和/和英』第2版 メディカルパブリッシャー
日本解剖学会用語委員会編（1944）『解剖学用語』日本解剖学会
日本眼科学会編（1988）『眼科用語集』第3版 日本眼科学会
日本気管食道科学会編（2003）『気管食道科学用語解説集』金原出版
日本胸部外科学会編（1993）『胸部外科学用語集』金原出版
日本胸部疾患学会編（1996）『胸部疾患学用語集』改訂第3版 日本胸部疾患学会
日本形成外科学会用語委員会編（1988）『形成外科用語集：欧和・和欧・図解』第2版
日本形成外科学会
日本外科学会用語委員会編（1997）『外科手術用語集』改訂第3版 金原出版

日本呼吸器学会編 (2006) 『呼吸器学用語集』改訂第4版 日本呼吸器学会
 日本産科婦人科学会編 (1983) 『産科婦人科学用語集』第3版 金原出版
 日本産科婦人科学会編 (1988) 『産科婦人科用語解説集』金原出版
 日本産科婦人科学会編 (1997) 『産科婦人科用語解説集』第2版 金原出版
 日本産科婦人科学会編 (2003) 『産科婦人科学用語集・用語解説集』改訂新版 金原出版
 日本産科婦人科学会編 (2008) 『産科婦人科学用語集・用語解説集』改訂第2版 金原出版
 日本産科婦人科学会編 (2013) 『産科婦人科学用語集・用語解説集』改訂第3版 金原出版
 日本産科婦人科学会用語委員会編 (1966) 『産科婦人科用語集』第2版 金原出版
 日本耳鼻咽喉科学会編 (2008) 『耳鼻咽喉科学用語集』金芳堂
 日本集中治療医学会編 (1992) 『英和和英集中治療用語集』医学図書出版
 日本循環器学会用語委員会編 (1995) 『循環器学用語集』日本循環器学会
 日本循環器学会用語委員会編 (2008) 『循環器学用語集』第3版 日本循環器学会
 日本消化器病学会編 (1996) 『消化器病学用語集』金原出版
 日本小児外科学会用語委員会編 (1988) 『小児外科手術用語集』金原出版
 日本神経学会用語委員会編 (2008) 『神経学用語集』改訂第3版 文光堂
 日本神経病理学会編 『神経病理学用語集』 <http://www.jsnp.jp/glossary/>
 日本整形外科学会編 (2011) 『整形外科学用語集』第5版増補 南江堂
 日本脊椎脊髄病学会編 (2010) 『脊椎脊髄病用語事典』改訂第4版 南江堂
 日本先天異常学会編 (1991) 『先天異常用語集』金原出版
 日本手外科学会編 (2012) 『手外科用語集』改訂第4版 ナップ
 日本内科学会編 (1960) 『内科学用語集』改訂第2版 医学書院
 日本内科学会編 (1998) 『内科学用語集』第5版 医学書院
 日本内視鏡外科学会用語委員会編 (1999) 『内視鏡外科用語集』医学書院
 日本脳神経外科学会用語委員会編 (2006) 『脳神経外科学用語集』改訂第2版 南江堂
 日本婦人科学会編 (1936) 『産科学婦人科学学術用語集』第2版
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1047222>
 日本麻酔科学会編 (2002) 『麻酔科学用語集』第3版 克誠堂出版
 日本リウマチ学会編 (2000) 『リウマチ学用語集』改訂第2版増補 南江堂
 日本リハビリテーション医学会編 (2007) 『リハビリテーション医学用語集』第7版 文光堂
 日置陸奥夫・中野保二編 (1950) 『対照独英和医語新辞典』東西医学社
 宮本叔・恩田重信編 (1902) 『新医学大字典』金原医籍店
 老年医学用語研究委員会編 (1998) 『老年医学用語集』ワールドプランニング
 『医学書院医学用語辞典 英和・略語・和英』(2012) 医学書院
 『医学大辞典』第16版 (1978) 南山堂
 『医学大辞典』第19版 (2006) 南山堂
 『医学用語ソーラス』第4版 (1999) 医学中央雑誌刊行会
 『医学用語ソーラス』第7版 (2011) 医学中央雑誌刊行会
 『現代医学大辞典 第一巻解剖組織胎生学篇』(1930) 春秋社
 『ステッドマン医学大辞典』第6版 (2008) メジカルビュー
 『日獨羅医語字典：ふりかなつき』(1934) 南山堂書店

『文部科学省学術用語集医学編』（2003）日本学術振興会
日本医学会医学用語辞典 WEB 版 <http://jams.med.or.jp/dic/mdic.html>

・辞書、辞典類

- 伊地知英太郎・新宮涼園編（1886）『袖珍医学辞彙』伊藤誠之堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832960>
- 岩川友太郎編（1884）『生物学語彙』集英堂
- 上田万年編（1917）『大字典』啓成社
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950498>
- 上田万年編（1993）『新大字典』講談社
- 上田万年・松井簡治編（1915）『大日本国語辞典』
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954647>
- 大島樸編（1906）『日独羅医語新字典』吐鳳堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833347>
- 大槻文彦編（1932）『大言海』富山房
- 小川環樹・西田太郎・赤塚忠編（1968）『新字源』角川書店
- 興津磐・大島樸編（1905）『独羅和訳医語新字典』吐鳳堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833034>
- 奥山虎章編（1881）『独和医学字典初編 解剖生理学語部』牧野吉兵衛
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833478>
- 落合直文編（1922）『言泉 日本大辞典』大倉書店
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/969159>
- 小柳司気太編（1936）『新修漢和字典』博文館
- 小柳司気太編（1939）『綜合漢和辞典』博文館
- 影山輝國・伊藤文生・山田俊雄・戸川芳郎編（2012）『新明解現代漢和辞典』三省堂
- 風祭甚三郎編（1887）『独和字彙』後学堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/903111>
- 加藤辰三郎・木村広平・児玉元吉編（1906）『和羅独英新医学辞典』南江堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833260>
- 鎌田正・米山寅次郎編（2011）『新漢語林』大修館書店
- 川上三郎編（1929）『和英独植物学用語新辞典』太陽堂出版
- 川上正治・宮地良治編（1906）『羅独和訳医学字典』南江堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832975>
- 菅野虎太編（1877）『羅甸七科字典』英蘭堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/861712>
- 金田一春彦・池田弥三郎編（1980）『学研国語大辞典』学習研究社
- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大編（2014）『三省堂国語辞典』
第7版 三省堂
- 行徳永孝編（1890）『挿入図画独和字書大全』金原蔵版
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/863473>

佐藤進・濱口富士雄編（2011）『全訳漢辞海』第3版 三省堂
 参謀本部（1881）『五国対照兵語字書』
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/842999>
 塩谷温編（1939）『新字鑑』弘道館
 司馬亨太郎・高田善次郎編（1909）『和独兵語字彙』精華書院
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/843385>
 尚学図書編（1986）『言泉 国語大辞典』小学館
 新宮涼園・武昌吉・柴田承桂編（1886）『独逸医学辞典』英蘭堂
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833314>
 新潮社編（2007）『新潮日本語漢字辞典』新潮社
 新村出編（1949）『言林』全国書房
 田中鍊太郎（1900）『独羅英和医学字彙』南江堂
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832961>
 藤堂明保編（1978）『学研漢和大字典』学習研究社
 西成甫編（1911）『実用和独羅医語字典：附仏和医語字典』金原出版
 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（2011）『岩波国語辞典』第7新版 岩波書店
 日本国語大辞典第二版編集委員会編（2000-2002）『日本国語大辞典』第2版 小学館
 服部宇之吉・小柳可気太編（1943）『詳解漢和大字典』富山房
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1126477>
 浜野知三郎編（1912）『新訳漢和大辞典』六合館
 原田政右衛門編（1918）『大日本兵語辞典』成武堂
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/986304>
 飛田良文・松井栄一・境田稔信編（2009）『明治期国語辞書大系』普16『辞林』大空社
 松村明編（2006）『大辞林』第3版 三省堂
 松村任三編（1886）『植物学語鈔』丸善
 諸橋轍次編（1960）『大漢和辞典』大修館書店
 諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎編（1982）『広漢和辞典』大修館書店
 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編（2012）
 『新明解国語辞典』第7版 三省堂
 亘理翠媛編（1911）『最新音引字典：普通語及兵語』厚生堂
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/862889>
 『校正宋本広韻 附索引』（2007）藝文印書館
 『説文解字注 標点本附索引』（2007）藝文印書館
 『独羅和訳袖珍医語字林』（1903）東京医事新誌局
 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833250>
 『文部科学省学術用語集植物学編』増訂版（1990）

・医学書、医学教科書類

足高善雄（1971）『新産科学』第2版 南山堂
 荒井清（1984）『産科学』南江堂

石川喜直（1904）『人体解剖学』吐鳳堂書店
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1082181>

今田東（1887）『賢列氏解剖学』島村利助
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2938213>

大澤岳太郎（1905）『新撰解剖学』南江堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833743>

岡澤貞一郎（1873）『解剖必携』宝文堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833498>

小川重男編（1991）『必修産婦人科学』改訂第4版 南江堂

奥山虎章・半井成質（1871）『講筵筆記』海軍軍医寮
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994969>

小澤静司・福田康一郎編（2009）『標準生理学』第7版 医学書院

倉智敬一（1983）『新産科学』南山堂

佐々木師興（1871）『解剖学動脈編』文部省
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833450>

篠田毅（1870）『解体説約』
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833425>

鈴木文太郎（1893）『局処解剖学』
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833551>

田口和美（1881）『解剖攬要』英蘭堂
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833507>

武昌吉（1873）『解体説略』万笈閣
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833428>

東京大学医学部編（1877）『医科全書解剖篇』島村利助
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832997>

中島一可（1893）『解剖学講本』松崎留吉
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833445>

奈良坂源一郎（1883）『解剖大全』名古屋新聞社
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833487>

奈良坂源一郎（1903）『解剖簡明』半田屋医籍商店
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833455>

畠中陸郎（2007）『呼吸器外科手術書』改訂第5版 金芳堂

藤森速水（1961）『産科学異常篇』金原出版

二村領次郎（1917）『近世解剖学』増訂第5版 金原出版

二村領次郎・森於菟・平光吾一（1934）『近世解剖学』第16版 金原出版

真柄正直（1951）『最新産科学異常篇』第3版 文光堂

松村矩明（1872）『解剖訓蒙』啓蒙義舎
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833458>

松村矩明（1872）『虞列伊氏解剖訓蒙図』啓蒙義舎
近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833459>

松村矩明（1876）『解剖摘要』敬虔堂

近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833490>

丸尾猛・岡井崇（2004）『標準産科婦人科学』第3版 医学書院

望月真人・桑原慶紀（1984）『標準産科婦人科学』医学書院

望月真人・桑原慶紀・丸尾猛（1999）『標準産科婦人科学』第2版 医学書院

森本齊次（1906）『解剖学講義』明文館

近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833441>

・その他

青戸邦夫（1970）「学術用語の表記の基準よもやま」『情報管理』13(8) pp. 490-498

大鳥蘭三郎（1932）「我医学に使用せらるる解剖学語彙の変遷」『中外医事新報』1189, pp. 468-476

大西克知（1897）『学生近視の一予防策』大西眼科医院蔵版

小川鼎三（1955）「明治前日本解剖学史」『明治前日本医学史』第1巻 日本学術振興会

小川徳雄・永坂鉄夫（2006）『医学用語。その批判的脱構築』診断と治療社

尾崎雄二郎編（1989）『訓読説文解字注』糸册 東海大学出版会

開原成允（2010）「医学用語の現状と課題」『日本語学』29(15), pp. 14-24

香川靖雄（1997）「医学の専門用語の問題点」『日本語学』16(2), pp. 50-59

鍵山俊太郎・古賀徳之・加世田繁・石原嗣郎・川副信行・佐渡島省三（2006）「冠動脈造影検査中に円錐動脈に楔入し、胸部誘導にてST上昇を認めた1例」Circulation Journal 70, Supplement III p. 1229

木下正中（1938）「日本婦人科学会ノ学術用語統一事業」『国語運動』2(8), pp. 51-54

木下正中（1946）「医学用語の選定についての報告」『日本婦人科学会雑誌』41(4), pp. 8-22

木村邦彦（1961）「解剖学用語のよみ方」『解剖学雑誌』36(6), pp. 575-576

木村邦彦（2008）「解剖学用語委員会の歩み」『解剖学雑誌』83(4), pp. 133-137

国立国語研究所「病院の言葉」委員会（2009）『病院の言葉を分かりやすく一工夫の提案一』勁草書房

近藤公久・天野成昭（1999）『NTT データベースシリーズ 第5巻「文字特性」』三省堂

笹原宏之（2007）『国字の位相と展開』三省堂

笹原宏之（2010）「学術用語と漢字」『JSL 漢字学習研究会誌』2, pp. 1-14

澤井直（2008）「我が国の解剖学用語—「蝶形骨」を例に—」『解剖学雑誌』83(4), pp. 123-126

澤井直（2012）「医学教育における医学用語—用語の浸透と統一を中心に—」坂井建雄編『日本医学教育史』東北大学出版会, pp. 323-344

澤井直・坂井建雄（2010）「昭和初期解剖学用語の改良と国語運動」『日本医史学雑誌』56(1), pp. 39-52

島田和幸（2012）「明治期における医学書の動向」坂井建雄編『日本医学教育史』東北大学出版会, pp. 295-321

下瀬謙太郎（1941）「医学用語」『国語文化講座 第5巻国語生活篇』朝日新聞社

沈国威（2007）「蘭学の訳語と新漢語の創出」『19世紀中国語の諸相—周縁資料（欧米・日本・

- 琉球・朝鮮からのアプローチ』 pp. 217-261
- 杉本つとむ (1976) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』 第一部 長崎通詞による蘭語の学習とその研究』 早稲田大学出版会
- 杉本つとむ (1978) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』 第三部 対訳語彙集および辞典の研究』 早稲田大学出版会
- 杉本つとむ (1987) 『解体新書の時代』 早稲田大学出版会
- 高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法—』 明治書院
- 中田諭 (2009) 「難解用語のこれがよく分らん 4 肺動脈楔入圧 (はいどうみやくせつにゅうあつ)」 『重症集中ケア』 8(1), pp. 76-77
- 日本医史学会 (1977) 『図録日本医事文化史料集成 第2巻』 三一書房
- 日本解剖学会百周年記念事業実行委員会 (1995) 『日本解剖学会百年のあゆみ：日本解剖学会100周年記念』 日本解剖学会
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」 『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究Ⅸ』 国立国語研究所
- 日向敏彦 (1987) 「近代学術用語と漢字」 『日本語学』 1987年2月号, pp. 37-45.
- 藤本淳・佐藤安正・国枝亮・奥信夫・森永堯 (1955) 「僧帽弁弁膜症に於ける肺動脈楔入圧と左心房圧との関係」 『呼吸と循環』 3(5), pp. 305-309
- 三瀬淳一 (1954) 「所謂肺毛細管圧 (1)」 『診療』 7(5), pp. 389-398
- 宮本忍 (1958) 「肺毛細管圧の病態生理学的意義について」 『肺』 5(3), pp. 187-201
- 森岡健二 (1969) 『近代語の成立 明治期語彙編』 明治書院
- 山本俊介・矢部充英・藤井崇・山本陽子・寺井岳三 (2011) 「開心術後に肺動脈カテーテルによる肺出血が疑われた1症例」 『麻酔』 60(5), pp. 638-640
- 「一般社団法人京都府臨床工学技士会ニュース」 2012年3月号
<http://kcet.jp/wpcontent/uploads/2012/01/12%E5%B9%B43%E6%9C%88%E5%8F%B7.pdf>
- 「学術用語審査基準」 『専門用語研究』 (1992) 4, pp. 49-52
- 「今週の問題 国語愛護同盟医学部会」 『日本医事新報』 (1935) 672, pp. 2188-2189
- 国語愛護同盟 『国語の愛護』 (1935-1936) 1-8
- 国語協会 『国語運動』 (1937-1944) 1-8
- Irving and Hertig (1937) "A study of placenta accreta" *Surgery, Gynecology & Obstetrics* 64: pp. 178-200
- Kaltreider (1945) "Placenta accreta Report of a case" *Bulletin of the School of Medicine University of Maryland* 30(1) pp. 1-10
- 聞蔵Ⅱ ビジュアル <http://database.asahi.com/library2/>
- 毎索 <http://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>
- ヨミダス歴史館 <http://www.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
- 神戸大学附属図書館新聞記事文庫 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/index.html>
- 中国基本古籍庫
- 早稲田大学古典籍総合データベース <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
- 新潟大学古文書・古典籍コレクションデータベース <http://collections.lib.niigata-u.ac.jp/>

bibliograph/search

WEB 懷徳堂 <http://kaitokudo.jp/index.html>

(以上、2014年8月2日閲覧)

【資料】

表 1. 各種漢和辞典の「楔」の音読みと熟語

出版年	辞典名	漢音	呉音	熟語（「楔」の読み）
1912	新訳漢和大辞典	カツ、ケツ、ケチ、セツ、セチ		—
1917	大字典	カツ、ケツ、セツ	カチ、ケチ、セチ	楔子（セツ）
1936	新修漢和大字典	ケツ、ケチ、セツ、セチ		—
1939	新字鑑	ケツ、セツ		楔子（セツ）
1939	総合漢和辞典	ケツ、ケチ、セツ、セチ		楔子（ケツ、セツ） 楔形文字（ケツ、セツ）
1943	詳解漢和大字典	ケツ、セツ		—
1960	大漢和辞典	カツ、カチ、ケツ、ケチ、セツ、セチ		楔穀（セツ） 楔撃（ケツ） 楔子（ケツ、セツ） 楔歯（セツ） 楔形文字（ケツ、セツ）
1968	新字源	ケツ、セツ	—	楔子（セツ）
1978	学研漢和大字典	カツ、セツ	ケチ、セチ	門楔（—） 楔子（セツ）
1982	広漢和辞典	カツ、ケツ、ケチ、セツ、セチ		楔形文字（ケツ、セツ） 楔撃（ケツ） 楔子（ケツ、セツ） 楔歯（セツ）
1993	新大字典	カツ、ケツ、セツ	ケチ、セチ	楔子（ケツ、セツ）
2007	新潮日本語漢字辞典	カツ、ケツ、セツ	ケチ、セチ	楔形（ケツ、セツ、くさび） 楔子（ケツ、セツ、くさび） 楔状（ケツ）
2011	新漢語林	ケツ、セツ	ケチ、セチ	楔形文字（ケツ、セツ） 楔子（ケツ、セツ）
2011	全訳漢辞海	カツ、セツ	—	楔子（セツ）
2012	新明解現代漢和辞典	カツ、ケツ、セツ	—	楔子（セツ）

表 2. 各種国語辞典中の「楔」を使用する語

出版年	辞典名	「楔」を使用する語	「楔」の読み
1907	辞林	楔子	ケツ
1915	大日本国語辞典	楔留 楔子 楔形	くさび ケツ セツ
1922	言泉	楔留 楔子 楔状 楔状文字 楔形文字	くさび ケツ→セツ ケツ→セツ ケツ→セツ ケツ→セツ
1932	大言海	楔子 楔形	ケツ セツ
1949	言林	楔形文字 楔子 楔状 楔状軟骨	ケツ→セツ ケツ ケツ ケツ
1980	学研国語大辞典	楔形 楔形文字 楔状	くさび くさび、ケツ→セツ ケツ
1986	言泉 国語大辞典	楔石 楔形 楔形文字 楔河豚 楔状 楔状骨 楔状文字	くさび くさび くさび、ケツ→セツ くさび ケツ ケツ、セツ ケツ→セツ
2002	日本国語大辞典 第2版	楔石 楔形 楔形文字 楔鋸 楔河豚 楔子 楔状 楔状文字 楔状骨 楔点	くさび くさび、セツ ケツ→セツ、くさび くさび くさび ケツ ケツ ケツ ケツ、セツ セツ

2006	大辞林 第3版	楔石 楔形 楔形文字 楔子 楔状 楔状骨	くさび くさび、セツ くさび、セツ ケツ ケツ ケツ
2011	岩波国語辞典 第7新版	楔状 楔状文字→楔形文字	ケツ ケツ→セツ
2012	新明解国語辞典 第7版	楔形文字 楔状	ケツ、セツ→くさび ケツ
2014	三省堂国語辞典 第7版	楔形文字	くさび、セツ

表2注)「楔」そのものは除いた。矢印は矢印の先の語を参照せよという旨が書かれていたことを表す。

表3. 新聞記事の振り仮名(1879~1950)

	ケツ	セツ	カツ	くさび	ケイ	キツ	カ	キ	ケ	不明	計
楔子	44	5	8	13	20	1	1		3	83	178
楔機	3				1					72	76
楔状	2		3		2	1				6	14
楔形	1			3						7	11
農務楔					2					8	10
楔式				7						2	9
楔入										9	9
楔戦術										3	3
楔締					1					2	3
要楔	2				1						3
牛楔					2						2
改良楔					1					1	2
楔点					1					1	2
大楔										2	2
連楔	1									1	2
共同楔										1	1
緊楔					1						1
金楔										1	1
釘楔	1										1
楔合	1										1

楔頭										1	1
楔圧搦法										1	1
楔圧法										1	1
楔環								1			1
楔有財産					1						1
結楔										1	1
殖産楔										1	1
貯蓄楔										1	1
割楔										1	1
楔作戦										1	1
楔戦法										1	1
楔型										1	1
鉄楔										1	1
合計	55	5	11	23	33	2	1	1	3	210	344

表3注)「楔子」で「くさび」の読みと集計しているものは2字で「くさび」と読ませるものである。

表4. 新聞記事の振り仮名(1985-2014)

	ケツ	セツ	くさび	不明	計
楔形		4	133	10	147
楔前部	6				6
楔状	1		1	1	3
楔子	1			1	2
塩水楔			2		2
割楔			1	1	2
楔石			2		2
楔庵			1		1
氷楔		1			1
木楔				1	1
楔型				1	1
楔模様			1		1
楔跡			1		1
合計	8	5	142	15	170

表 5. 日本医学会各専門学会発行の用語集中の「楔」

	専門分野	用語	「楔」の読み	「楔」の原語
1	解剖学 (2007)	楔、楔状、鋤骨楔状部、内側 / 中間 / 外側楔状骨、楔状軟骨、楔状結節、楔間関節、背側 / 底側 / 骨間楔間靭帯、楔状核、楔状下核	ケツ	cuneiform
		楔状束、楔状束線維	ケツ	cuneate
		楔舟関節、背側 / 底側楔舟靭帯、楔立方関節、背側 / 底側 / 骨間楔立方靭帯、楔状束核小脳線維 / 脊髄線維	ケツ	cuneo-
		楔部、楔前部	ケツ	cuneus
2	内科学 (1998)	楔状	くさび ケツ	cuneiform
		楔状部	ケツ	cuneus
		楔入圧、肺動脈楔入圧、楔状切除、楔状椎	ケツ	wedge
3	消化器病学 (1996)	楔状生検	くさび*	wedge
4	循環器学 (2008)	楔入圧、肺動脈楔入圧、肺動脈楔入血管造影法	セツ	wedge
5	外科学 (1997)	楔状切除	ケツ*	wedge
6	整形外科学 (2011)	楔状骨	ケツ	cuneiform
		楔舟関節	ケツ、セツ	cuneo-
		楔状足底挿板	ケツ	wedge
		楔状骨折、楔状骨切り術、楔状椎	ケツ、セツ	
		楔開き骨切り術	くさび	
7	産科婦人科 (2013)	楔状切除術、卵巣楔状切除術	ケツ	wedge
8	眼科 (1988)	楔状白内障	くさび*	cuneiform
9	耳鼻咽喉科 (2008)	楔状軟骨	ケツ*	cuneiform
10	医学放射線科学 (2002)	楔肝静脈造影、くさびフィルタ、くさび等線量角	くさび	wedge
		肺動脈楔入圧	ケツ*	
11	気管食道科学 (2003)	楔状軟骨、楔状結節	ケツ*	cuneiform

12	麻酔科学 (2002)	楔入圧	セツ	wedge
13	胸部外科 (1993)	楔状切除	—	wedge
14	脳神経外科 (2006)	楔状椎	ケツ	wedge
15	医真菌学 (1999)	くさび状	くさび	cuneate, cuneiform
16	神経学 (2008)	楔状束、楔状束核	ケツ	cuneatus
17	老年医学 (1998)	クサビ状欠損	くさび	wedge
		楔状椎	ケツ	
18	リハビリテーション医学 (2007)	くさび	くさび	wedge
		楔状足底板	ケツ*	
19	呼吸器学 (2006)	楔状切除、楔入圧、楔入部圧、肺動脈楔入圧、平均肺動脈楔入圧、毛細血管楔入圧	ケイ*	wedge
20	リウマチ学 (2000)	くさび板	くさび	wedge
		楔状骨切り術、楔状椎	ケツ、セツ	
21	先天異常学 (1991)	楔状椎	セツ	wedge
22	形成外科 (1988)	楔形切除	くさび	wedge
		楔状骨切り術	セツ、ケツ	
23	小児外科 (1988)	楔状切除術	—	wedge
24	医学教育学 (2003)	くさび型カリキュラム	くさび	—
25	集中治療医学 (1992)	楔入圧	ケツ*	wedge
26	神経病理学	楔状束	ケツ	cuneate
		楔部		cuneus
27	内視鏡外科 (1999)	楔状切除、楔状切除術、楔状骨切り術、卵巣楔状切除術、胃楔状切除術、楔状椎	セツ*	wedge
28	手外科学 (2012)	くさび骨切り術、くさび閉じ骨切り術、くさび開き骨切り術	くさび	wedge
		楔状骨切り術、楔状切除法	ケツ、セツ	
29	脊椎脊髄病学 (2010)	楔状椎、楔状骨折	ケツ*	wedge

表5注) *を付した読みは用語集・用語辞典に読み仮名として直接付されたものではなく、索引や用語集の五十音の配列から判断したものである。これも学会が読みについて下した判断として、読み仮名をつけたものと同様に扱うことにする。

表 6. 明治期の独和、和独辞典中の「楔」

出版年	資料名	用語	読み
1877	羅甸七科字典	楔	—
1881	独和医学字典初編 解剖生理学語部	— (槩)	—
1886	袖珍医学辞彙	楔、楔状ノ、楔状骨、楔状葉、楔状軟骨	—
1886	独逸医学辞典	楔、楔状ノ、楔状骨、楔状索、楔状柱	—
1887	独和字彙	楔	くさび
		楔骨、楔骨棘、楔骨洞、楔骨角、楔骨櫛、 楔骨顎窩、楔骨筋、楔骨嘴、楔形ノ	—
1890	挿入図画独和字書大全	楔、楔片	くさび
		楔状骨	カツ
1900	独羅英和医学字彙	楔、楔形ノ、楔状ノ、楔状枕、楔状骨舟 状骨靱帯、楔状索、楔状骰子骨靱帯	—
1903	独羅和訳袖珍医語字林	楔、楔状骨、楔状、楔状枕、楔舟状骨靱 帯、楔状索、楔骰子骨靱帯	—
1905	独羅和訳医語新字典	楔、楔状ノ、楔状截除法、楔状骨折、楔 状枕、楔状舟状骨靱帯、楔状索、楔状骨 骰子骨靱帯	—
1906	羅独和訳医学字典	楔状骨、楔状ノ	—
1906	日独羅医語新字典	楔、楔状ノ、楔状索	ケツ
1906	和羅独英新医学辞典	楔	くさび
		楔、楔状ノ、楔状索	ケツ
1911	実用和独羅医語辞典	楔、楔状ノ、楔状索	ケツ

表 7. 明治期医学教科書中の「楔」関連語

出版年	資料名	Sphenoid bone	Cuneiform bone	読み
1870	解体説約	楔骨	櫛骨	—
1871	解剖学動脈編	蝴蝶骨	—	—
1871	講筵筆記	蚊蝶骨	櫛状骨	—
1871	解体学語箋	蝴蝶骨	三稜骨	—
1872	解剖訓蒙	蝴蝶骨	楔状骨	—
1872	虞列伊氏解剖訓蒙図	蝴蝶骨	楔状骨	—
1873	解体説略	蝴蝶骨	三稜骨	—
1873	解剖必携	胡蝶骨	楔状骨	—
1876	解剖摘要	蝴蝶骨	楔状骨	ケイ
1877	医科全書解剖篇	蝴蝶骨（又ハ 楔状骨 ト名ク）	楔状骨	—
1881	解剖攬要	楔状骨 （一名蝴蝶骨）	櫛状骨	—
1883	解剖大全	蝴蝶骨（一名 楔状骨 ）	楔状骨	—
1887	賢列氏解剖学	蝴蝶骨（一名 楔状骨 ）	楔状骨	—
1893	解剖学講本	蝴蝶骨（ 楔状骨 ）	楔状骨	—
1893	局処解剖学	—	楔状骨	—
1903	解剖簡明	蝴蝶骨（一名 楔状骨 又翼状骨）	楔状骨	—
1904	人体解剖学	蝴蝶骨	楔状骨	—
1905	新撰解剖学	楔骨 （亦、胡蝶骨ノ名アリ）	楔骨	—
1906	解剖学講義	胡蝶骨	楔状骨	—
1917	近世解剖学 5 版	蝴蝶骨	楔状骨	カツ
1934	近世解剖学 16 版	蝴蝶骨	楔状骨	ケツ

表 8. 過去の一般の医学用語辞典の「楔」

出版年	資料名	用語	読み
1878	医語類聚	楔状軟骨、楔状骨	—
1902	新医学大字典	楔状、楔状枕、楔舟状骨靭帯、楔状索、楔骰子骨靭帯	—
1930	現代医学大辞典	楔状骨、楔状索、楔状竇、楔状軟骨	セツ
1932	解剖学名彙 第17版	楔状骨、第一楔状骨、第二楔状骨、第三楔状骨、楔状軟骨、楔状葉、楔前葉	ケツ
1934	日独羅医語字典：ふりかなつき	楔状切除術	ケツ
1950	対照独英和医語新辞典	楔、楔状の	くさび
		楔状骨、楔状突起、楔状切除術、楔状束、楔部	—
1968	常用医語事典	楔状椎、楔状骨切り術、楔形フィルター	くさび
		肺楔入圧	—
1978	南山堂医学大辞典 第16版	楔状フィルタ、楔状骨切り術、楔状束、楔状椎	ケツ

表 9. 現在の一般の医学用語辞典等の「楔」

出版年	資料名	用語	読み
2006	南山堂医学大辞典 第 19 版	楔状骨、楔状束、楔状軟骨、楔状切除術、 楔状椎、楔状フィルタ	ケツ
		肺動脈楔入圧、楔入胎盤	セツ
		卵巣楔形切除術	くさび
2008	ステッドマン医学大辞 典 第 6 版	くさび状生検	くさび
		楔舟関節、楔舟靭帯、楔前部、楔前部動脈、 楔部、楔入圧、楔立方関節、楔立方靭帯	ケツ
		楔、楔形白内障、楔状核	くさび、ケツ
		楔状頭	ケツ、セツ
		楔状結節、楔状骨間関節、楔〔状〕切除〔術〕、 楔状束、楔状束核、楔状束結節、楔状束 小脳路、楔状束脊髄線維、楔状軟骨、楔 状肺活量計	くさび、ケツ、 セツ
2011	医学用語シソーラス 第 7 版	楔理論	くさび
		楔入圧、肺楔入圧、肺動脈楔入圧、肺静 脈楔入圧、肺毛細管楔入圧	ケツ
2012	医学書院医学用語辞典	楔板、楔開き骨切り術、楔フィルター	くさび
		楔舟関節、楔状核、楔状肝静脈造影、楔 状欠損、楔状骨切り術、楔状生検、楔状 切除術、楔状束、楔状束核、楔状束核小 脳路、楔状椎、楔状肺切除術、楔状白内障、 楔入圧	ケツ

表 10. 日本医学会、文部科学省発行の用語集・用語辞典中の「楔」

出版年	資料名	用語	楔の読み	変更点、特徴
1944	医学用語集第一次選定	楔状軟骨、楔部、楔状束、楔状骨、楔前部、楔状	ケツ	—
		楔形	くさび	
1975	日本医学会医学用語辞典	楔状の、楔状歯、楔状子宮組織切除、楔状部、楔状骨切り術、楔状切除、楔入〔部〕圧、楔状欠損、楔状椎	ケツ	かな書きを主とし漢字を副とする
		くさび状欠損、〔くさび法〕肺毛細管圧	くさび	
1991	日本医学会医学用語辞典 英和	楔状骨、楔舟関節、楔状部、楔状葉	ケツ	楔舟関節など9語の追加 「セツ」が併記される読みに登場
		楔状フィルタ、卵巣楔状切除術、くさび状欠損	くさび	
		楔状の、楔状束核、楔状軟骨、楔状白内障、楔状歯、楔状結節、楔状椎、楔状子宮組織切除術、楔状骨切り術、楔入〔部〕圧、楔状欠損、楔状切除、肝静脈楔入圧	ケツ、セツ	
1994	日本医学会医学用語辞典 和英	楔状結節、楔状骨、楔状束核、楔状軟骨、楔状の、楔状葉	ケツ	「ケツ」を優先するが、他の読みもすべて併記
		楔状欠損、楔状椎、楔入圧	セツ	
		楔、楔〔状〕フィルタ、卵巣楔状切除〔術〕	くさび	
		楔状切除	ケツ、セツ	
		楔状歯、楔状子宮組織切除、楔状椎、楔状白内障、楔状部	ケツ、セツ、くさび	
2001	日本医学会医学用語辞典 英和 第2版	楔状束、楔状束核、楔状束結節、楔状骨、楔状軟骨、楔状白内障、楔状結節、楔部、楔舟関節、楔状葉、楔状骨切り術、病変部の楔状切除、肺楔状切除、卵巣楔状切除、楔状欠損、肝静脈楔入圧、楔入肝静脈造影、楔入肝静脈圧、肺動脈楔入圧	ケツ	「ケツ」の優先は変わらず。「セツ」の読みを整理
		楔状フィルタ	くさび	

		楔状の、楔	ケツ、 くさび	
		楔状歯、楔状椎、楔状子宮組織切除〔術〕、楔状部、楔状切除	ケツ、セツ、 くさび	
2003	文部科学省学術用語集 医学編	楔状椎、楔状切除術	ケツ	原語の違いと読みの違いが一致
		楔状、楔状白内障	くさび	
2007	日本医学会医学用語辞典 英和 第3版	楔状束、楔状束核、楔状の、楔状軟骨、楔状骨、楔状軟骨、楔状白内障、楔状歯、楔状結節、楔状部、楔状葉、くさびの先端論法、楔状フィルタ、楔状骨切り術、楔状切除、肺楔状切除、卵巣楔状切除、楔状欠損、楔状切除、楔状椎	くさび	優先する読みを「くさび」に変更
		肝静脈楔入圧、楔入肝静脈造影法	ケツ	

表 11. 楔状切除の読み

出版年	資料名	楔形 / 楔状	「楔」の読み
1934	産科学婦人科学学術用語彙 第1版	楔状	セツ
1934	日独羅医語字典：ふりかなつき	楔状	ケツ
1936	産科学婦人科学学術用語彙 第2版	楔形	くさび
1950	対照独英和医語新辞典	楔状	—
1966	産科婦人科用語集 第2版	楔形	くさび
1975	日本医学会医学用語辞典	楔状	ケツ
1983	産科婦人科用語集 第3版	楔状	ケツ
1988	産科婦人科用語解説集 第1版	楔状	—
1988	形成外科用語集：欧和・和欧・図解 第2版	楔形	くさび
1988	小児外科手術用語集	楔状	—
1991	日本医学会医学用語辞典 英和	楔状	ケツ、セツ
		楔状（卵巣）	くさび
1993	胸部外科学用語集	楔状	—
1994	日本医学会医学用語辞典 和英	楔状	ケツ
		楔状（卵巣）	くさび
1996	胸部疾患学用語集 改訂第5版	楔状	キツ
1997	産科婦人科用語解説集 第2版	楔状	ケツ
1997	外科手術用語集 改訂第3版	楔状	ケツ
1998	内科学用語集 第5版	楔状	ケツ
1999	内視鏡外科用語集	楔状	セツ
2001	日本医学会医学用語辞典 英和第2版	楔状	ケツ、セツ、 くさび
2003	学術用語集医学編	楔状	ケツ
2003	産科婦人科用語集・用語解説集 改訂新版	楔状	ケツ
2006	呼吸器学用語集 改訂第4版	楔状	ケイ
2006	南山堂医学大辞典 第19版	楔状	ケツ
		楔形（卵巣）	くさび
2007	日本医学会医学用語辞典 英和第3版	楔状	くさび
2008	産科婦人科用語集・用語解説集 改訂第2版	楔状	ケツ
2012	医学書院医学用語辞典	楔状	ケツ
2012	手外科用語集 改訂第4版	楔状	ケツ、セツ

2013	産科婦人科用語集・用語解説集 改訂第3版	楔状	ケツ
------	----------------------	----	----

表11注)「(卵巣)」は「卵巣楔状/楔形切除術」での立項があり「楔状/楔形切除」と読みが異なる場合に付した。

表12. 楔入圧の読み

出版年	資料名	「楔」の読み
1954	三瀬「所謂肺毛細管圧(1)」	ケツ
1968	常用医語事典	—
1975	日本医学会医学用語辞典	ケツ
1991	日本医学会医学用語辞典 英和	ケツ、セツ
1992	集中治療学用語集	ケツ
1994	日本医学会医学用語辞典 和英	セツ
1996	胸部疾患学用語集 改訂第5版	キツ
1998	内科学用語集 第4版	ケツ
1998	医学用語読み方辞典	セツ
1999	医学用語シソーラス 第4版	ケツ
2001	日本医学会医学用語辞典 英和第2版	ケツ
2002	麻酔科学用語集	セツ
2002	放射線診療用語集 改訂第3版	ケツ
2006	呼吸器学用語集 改訂第4版	ケイ
2006	南山堂医学大辞典 第19版	セツ
2007	日本医学会医学用語辞典 英和第3版	ケツ
2008	循環器学用語集 第3版	セツ
2008	ステッドマン医学大辞典 第6版	ケツ
2011	医学用語シソーラス 第7版	ケツ
2012	医学書院医学用語辞典	ケツ